



和文讀本卷三

武勇

袴垂保昌小あふこと

宇治拾遺物語

源隆國卿

昔袴垂とていみどきぬをびとの大將軍ありたり。
 十月ばつり頃よ衣の用ありたれを衣少し盗おうらん
 とてさる頃べき所ヲらうのひありまけるよ夜中設
 ちのりふ人皆志ハマツクぐありちて後月の朧歩あるふ



稻垣千穎

輯

きぬあやうと着たりたるぬいのさしぬまのそば
衣 挟みてきぬの狩衣めきとる着てたゞ一人笛ふき
帛 行きもやうきぬりゆけばあまれ是を我よ
きぬ得させんとて出たる人なめれと思ひて走
里かくりてきぬを剥ぎんと思ふあやうく物
の恐しく覺えられバ添ひて二三町ばうりけ
ども我小人こそ付きとると思ひたるうきも
なしいやく笛を吹きてつけバ試みんと思
ひて足を高くして走寄りたるよ笛を吹き

なごり見返りたるうき取りのうきづくも覺
えざりられバ走里のきぬかやうふあまたび
とさよかうさまふさる小露ばうりも騒ぎとるけ
しきあし希有の人うあと思ひて十余町をり
具して行きさ里とてあらんやはと思ひて刀
を抜き走里かくりたる時ふそのたび笛をふ
きやみてうらうりてこハ何者ぞとふよ心も
失せて我ものあやうでついあらぬ又そのある者
どとくバ今はうぐともさもさざじと覺え

られバ。むとちぎふ候ふと。ソバ。何者ぞとくへバ。
あぎな袴垂剥人となん剥しめれ候ふと答ふまはさ
しふ者ありとまうぞ。危げふ希有のやつ奴うあ
ひひて。供ふまうでことばうりひひけて。又同ト
様ふ笛ふきてゆくカ此の人のけしき。今はうごとも
よもみかまうと覺えられバ。鬼ふ神神とくをたる
やうカよて。共よ行くほごふ家よゆきつきぬ。ソゴ
ぞと思へバ。摂津前司保昌本といふ人ありたり。家の
内よよびひれて。綿あつき衣一を給ちりてまぬ

の用あらん時ハ。参りて申せ。心も知らざらん人
ふとりかゝりて。汝あやまちをなとありしを。あ
さましくむくつけくおそろしりカいみカト
りし人のありさまなり。捕下へられてのちかカり
けるカ

重忠長居相撲のこと 古今著聞集

橘 成 季

鎌倉前、右大将家小東ハカ國うちまぐりたる。大
力の相撲出きて申して云。當時長居ナガよ手向カをべ

き人おぼえ候も、富山莊司次郎は、くろぞ心ふ
く候ふ。それとも長居ハ。たやましく、はいのや
悪ヒひきは、さらの侍らんと詞も、まじり候ひ
なり。大將聞給ひて、此事ぬと、まじり思給ひつる。
折ふ。重忠出来りなり。白き水干ふ。葛袴。黄あ
きぬをぞ着しり。侍ふ。大名小名所も、たかく居
あみする中を、まけて座上ふひと居しり。大將
大將を、近くをまじりとあり。れども、畏りて
侍りけり。さそ物語して、抑所望の事の候ふを。

申し出さんと、思ふ。定めを不祥コを侍らんと
らん。と思ひ給ひあぐら。又た、ふやまんも、忍びが
たくて、思ひ煩ひナ。とのこまをせられ、重忠と
かく申は、事ハなきて、畏りて聞居たり。此事
たび、ふあり。なる時、重忠ちと居直りて、君の
御大事、何事よて候ふとも、いので、子細コを申候
むんと、しひたりければ、大將入興ハ。たまひて、そ
の庭、小長居め、候ふぞ。貴殿と手合をして、試
むと申は、なり。東ハカ國のまぐりたる、自

稱仕る可ぬとまゝう覺え候へば頼朝なりとも試
とむやと思ひ候へどもとりときを其方をて本ノマごら申
ぞ。試とたゆみとのこまをせられば重忠存外其方げふ
思ひて、弥、深く畏りていふことなり。大將されば
これ、これハ身をぐらもひあひの事みて候へきり
ながらも、己が所望此事ありと侍りたる時、重
忠座を坐敷とちて閑所へ申きて、くカマを急、烏帽子
がけあどして、り、長居ハ庭小床子小尻うけて
候ひたるカ。それもカとちて、たふさぎ禪のきてぬり

出で、り、まこハ體力士の如く、ふハえられば。
畠山もいハとハあハぼえりる。さて寄合ハりる
小、手合ハて、長居、畠山が小くびを強くうちて、袴
の前腰をとハんハりるを、畠山、左右の肩をひ
とハさへて、近づけハむ、かくて程ハられば、景時、今は
事ハづハごらん候ひぬ、さハやうハよハて、や候ふべハんハと
申ハりるを、大將、いハふハさるやうハあらん、勝負
あるべし、とのこハまをせをてぬば、長居を急り、
小、足ハを急てり、やハて死入りて、足をふみハら

しつれ^バ人々をりて、おしつめてかき出しより、重
忠ハ座より入りつ。事もなく一言もいふことあ
てやづて、いせより長居ハ、それより肩の骨くご
けて、おこさるおたりて、^{相撲}まぢひらる事もたより
不具^{骨をとり}ひびぎよりるよこを^{目驚}きさるこ
となり

遣唐使虎を殺すこと 宇治拾遺物語

源隆國卿

今ハ昔遣唐使よりあこしつ不渡りける人の

十ばよりある子をえ見であるまどよりつれバ具
して渡りぬ。さうまぐりけるほどふ雪のいと高
くふりたりり日ありきもせで居よりるふ
このちどの遊おいぬるが、おそく歸里れば、
あやしと思ひて、出で見れば、あしが、^後あの方
方^従あみて申きたるふ添ひて、大ある犬の足形
ありて、それよりこのちどの足う見え山さま
ふゆきたるを見て、これハ虎の喰ひていきける
なめりと思ふ。為ん方あく悲しうして、太刀をぬき

て足形を尋ねて山の方ふ申きて見れば岩屋の口
ふこのちごを喰殺して腹をぬがりて伏せり太
刀をもちて走里よれば得^{ニゲテ}みげてもい^{ニゲテ}いでかい^{ニゲテ}うが
まりて居たるを太刀もちて頭をうて^{ニゲテ}鯉の頭をわ
やうかわれぬ次おまさこそばさまふくちんとて走里
よる^{下ラ}背中をうて^{ニゲテ}背骨をうちきりてく^{ニゲテ}く^{ニゲテ}と
な^{ニゲテ}し^{ニゲテ}の^{ニゲテ}さて子をば死^{ニゲテ}れども脇ふかい挟みて家
ふ歸りこればその國の人々見ておぢあざむこと限
なし^{ニゲテ}り^{ニゲテ}ろ^{ニゲテ}こ^{ニゲテ}の^{ニゲテ}人^{ニゲテ}ハ^{ニゲテ}虎ふあひて^{ニゲテ}る^{ニゲテ}事^{ニゲテ}ふ

難きふかく虎をば打殺して子を取返して来た
を^{ニゲテ}バ^{ニゲテ}り^{ニゲテ}ろ^{ニゲテ}こ^{ニゲテ}の^{ニゲテ}人^{ニゲテ}ハ^{ニゲテ}い^{ニゲテ}み^{ニゲテ}ド^{ニゲテ}き^{ニゲテ}事^{ニゲテ}ふ^{ニゲテ}ソ^{ニゲテ}ひ^{ニゲテ}て^{ニゲテ}お^{ニゲテ}ほ^{ニゲテ}日^{ニゲテ}本
の^{ニゲテ}國^{ニゲテ}よ^{ニゲテ}は^{ニゲテ}兵^{ニゲテ}の^{ニゲテ}こ^{ニゲテ}こ^{ニゲテ}ハ^{ニゲテ}な^{ニゲテ}ら^{ニゲテ}び^{ニゲテ}あ^{ニゲテ}き^{ニゲテ}國^{ニゲテ}なり^{ニゲテ}と^{ニゲテ}め^{ニゲテ}で
られ^{ニゲテ}ど^{ニゲテ}子^{ニゲテ}死^{ニゲテ}な^{ニゲテ}れ^{ニゲテ}バ^{ニゲテ}あ^{ニゲテ}ら^{ニゲテ}る^{ニゲテ}こ^{ニゲテ}の^{ニゲテ}人^{ニゲテ}ハ^{ニゲテ}い^{ニゲテ}せん^{ニゲテ}

遊戯

行成卿扇合のこと 古今著聞集

橘 成 季

行成卿いよご殿上人のころ殿上りて扇合とよ

ことありたりふ人々。珠玉をうごり。金銀をまがきん。
 されおとらぶとよとなみあへりたり。彼の卿ハ黒く
 めりたる。ほそぼぬに。黄たる紙をりて。樂府の要
 文を。真草細骨よりちよせりて。そこらぐ書きていざ
 されりける。御門御覽ヲ御覽せりきりて。此扇こそ。ソゴ
 をりもまぐれたれとて。御前より先られける。
 とやいと伝へたる

花合 古今著聞集

橘 成 季

後二月八。潤二
 月をいふ
 内の女房内裏
 の女官をいふ

右衛門の陣ハ
 紫宸殿の西南
 月花門の内
 あり

さくらびとハ催
 馬楽呂の歌の
 名あり

長治二年後、二月廿日あまりの頃、内の女房少々。
 花を見侍りたり。廿三日ハ、一枝を折置て奉るべき
 といふ。天氣ありたりども、日くれて奉らざりけり。其
 うらみありとて、つぎの日、左右をこころりて、花を合
 せられり。左の方のひと、櫻の枝をとりて、右衛門の
 陣右衛門の右衛門後、ふらふらしたて。ソ五枝えをえらびて、もて
 参りたり。備後、介有賢、朝臣、拍子とりて、櫻人をうと
 ひり、管絃をもつけ侍りたり。この花を、泉の御所
 ふうふうと急て、釣殿まで御遊ありたり。右の方。

俳諧

道風朝臣の朗詠集のこと 徒然草

ト部兼好

ある者小野道風のかける和漢朗詠集とて、もち
たりたるをある人御相傳浮虚ける事よ、侍らドあれ
ども、四條大納言、えらむれたるを、道風かんと、
時代や違ひ侍らん公任おぼつたなくこそと、いひられ、
さ候へバこそ、世ふあり難き物よは侍りなれと
て、いよいよく秘ひりたり

鳥羽僧正の繪のこと 古今著聞集

橘成季

鳥羽僧正ハ、近き世ふはななく、びあき繪のきたなり、
中中のほごの事よ、アツクニ供米の不法のことありけ
る時、繪小うをるる、バ道風のあきくると、小米の俵を
多くあきあげ、ちりちひの如く、小空よあ
がるを、大童子法師輩げら、ちり塵と、り灰と、とテと、然んと
し、下口を、ささと、ぐ、小おり、ろろ筆をふるひ、そ
う、をを、誰の、ちり、り、らん、其繪を、院御らんと

て御入興ありりり。そのころを僧正小御たぐぬ
ありりれバ。あまり小供米不法は候ひて。實のも
のハ入り候をで。糟糠のみ入里て軽く候ふほど
小辻風小吹き上げられ候ふを。さりとてハとて。
小法師ばらみ取りとてめんとい候ふがを。い
候ふを書きて候ふと申されりれバ。比興の事
ありとて。それより供米のささまびくあり
て。不法のことなりりりり」

學生定茂のこと 古今著聞集

橘 成 季

進士志定茂とつよさむらひ學生ありりる。ある
人のもと小。有馬の湯へ行くとして。むのちきを人
小借りよりなるふひとかけたりたりりりを見
て。ふらまぞかいたる。過分ありとて。つが
きばうへてけり。その曉になりて。片皮小左右
の足をいれて。馬よのらんと。なるふ。何為の
られん。あひよあひたる。下人ありて。おのせけ
れども。かあを。かくのりら。つらふ。ほども。人見あ

上達部
小のこ
キ人ナリ

ひて。あれハソのよといひるぐらひるをり
めてさとり彼にりり。きこトイヒを
彼の定茂。兼元二年十月廿八日。文殿の作文小参
里よりりる。復の袍を着よりりるを見て。上下お
らふことかぎりなり。定茂おのれを笑ふとは知
りげもなうして。その日ハやみよりり後小あるかん
づち達部べの許へ参りて。申りるハ下ひとひ文殿の
作文小。復の袍を着てまゐりて侍りしを。人々
見候ひて。あやうり小學問を上して。四季を下ふ志

らぬやさ優さ。いと評ふさ評うめよ評こそ評のりて候へ。
と自讃優し評る身評は評ま評く評ま評の評嘲評哂評ま評る評こと評と評限評な
りりりり」

良覺僧正のまび名のこと 徒然草

ト部兼好

公世の二位のせう兄と弟良覺僧正ときこ僧えし
極めて腹あ兄し弟き人ありりり。坊のかさ僧は僧り僧小お
ほ僧き僧ある僧複僧の僧水僧の僧あり僧り僧れ僧バ僧人僧え僧の僧水僧の僧僧僧正僧と
ぞ僧い僧ひ僧り僧る僧。此僧名僧然僧る僧べ僧う僧ら僧と僧て僧。彼僧の僧水僧を僧伐

里乃るほづぶある日大麻かゝるり乃るこのを
とこおひゆる。さるるうけととりたるん念
なり射殺したりとつひて弓の上手のよう人小
きうせんとおひひてさるるうけさる麻小向
ひて大うり雁股矢番をあげて射たり乃るほづぶ
其矢さるのあは中ら番してさるるうけさるり
乃るのづゝ小あさるりさるるをばのづゝいされて
麻ハ事ゆゑなくさるるをあげてゆきさるり此
男頭の撥らさるるをさるれどもさるる益なり

猫まゝと怖るゝ連歌師の事 徒然草

ト部兼好

奥山小猫まゝとつよまのありて人をくらふなる
と人のつひ乃る山な〜ぬども此処等も猫の
へあがりて猫まゝとありて人ヲとる事ハあたる
ものをとつよ者あり乃るをな小阿彌陀佛との
や連歌ノ乃る法師の行願寺のほ〜り小あり乃る
の一人コレキテあり乃る身ハさるるさるる事小コレと思
ひけるころもあるさるるまで夜ふくるま

で連歌して只ひとりうへりりるふ。小川のちこふ
て音よきし猫すこ。あやまらぬ足のゆとふ
ととり来て。やがてかきつゝまゝの頸のほどをくらん
と肝袖ころもろせを防がん喪とまゝふ。ちのとも
あく足もたぐず。小川へころび入りて助けよや。猫
まよやくとまけべ。家々より松どもとも
て走りよりて見れば。此辺ころりふ見知る僧な
り。こハツのふとて。河の中より抱きおこし。これバ
連歌の賭とりて。扇。小箱をど懐ふ持くるも。水小

入りぬけらうして助けたるさまにて。まよく家
まよりみたり。飼ひける犬の。くらられどぬを忘
りてとびつきりけるカとぞカ

をこそ者巴の影お怖る語 今昔物語

源隆國卿

今は昔受領アタリの郎等ふ心ハおくれ臆て人小武く見え
んと思ふスリヨウをことありり。ある日あつきの外へ
申うんとて用意しるふ。其妻未明おまきて。くひ
物のまうけをせんとまゐるふ。ありあけの月の

板間よりきり入りたるひとりよそあなの影のう
つりたるを見て。大よあそれつ。あらしてさらざ
つ。夫があしこるそはふにげゆきて。夫が耳小
さくゆきけるハカ側と小髪あろくとしたる童
をぬまびとが入きてたちるあり。出て見たま
といへバ夫それハ盗つうせんときるよやアランぬき事
かなとつふあふ枕上おかけたる太刀をとりて。
其中の頸うちおとさんとのしりきて。髪うちみど
しあごぐら。はごかよてつでけるが。月影おあの

がかげのうらりを見て。童よはあろで。太刀ぬ
きたるをよこそありりれ。かたのふまオモヒテとふ
ひこたうききとさけびて。まげりて。妻お向ひ
て。おもとハ女御許らるさきつらりのの妻とこそありひ
つるお何を見あやうりたるよやアラシらはぬまびと
よハあらで。髪みどしたる男の。太刀ぬきもちる
おこそあまのつをされどもこの盗人臆病ののとみ
えて。つごのソでたるを見て。持ちたる太刀をおと
をりあるひつ行カ我ハ外へゆく門出なれを。はご

なき疵被らんコトも益なり。を女をなまきばよも切ら
ト申きて追ひつゞるべしといひて。夜を引のぐり
て知あつくり。妻いぢく。うひなき事あり。かくて
弓矢をとりて仕へ給ふ。やアラシいでこれゆきて見
んとて。とちゞるふ。夫のそばはあり。かみ紙
志やうどしはあつり。ればたう。夫が上におほ
ひぬ。夫障子こゑハ盗人があそひかゝる。と心得て。
聲をあげてさけび。妻が障子いぢく。盗人は
ちぢく立さりたり。その上あハ障子のたれ
ちぢく立さりたり。その上あハ障子のたれ

かくりたるなりと。ソト時。夫あまうあがり見る小。
盗人もあられバ居直りて。はだりたる脇をかき
て。手をぬぐりて。そのやつおことよ。我が許小入
来て。物取紙りて去り。あ奴や盗人子の障子をあみ
うけて去りふり。入りて志奴ば。あ奴ら奴は。
必搦めてま紙。こ紙お紙とのつ紙あ紙てかくは紙この
一つと紙ひ紙られバ妻ハあ紙き紙てぞ笑ひ紙る。
後小妻が人小語り紙るを。聞傳へて。かく紙なん紙た
り紙る紙と紙なり。

羈旅 離別 附

治養四年福原の新都小供奉の人々所々

遊覽の條 源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

八月十日あまよりよありて新帝の供奉の人々つれ
づをなぐさみこづらひ^テ名所の月を見んとてお
もひく^難小行別るあるハ住江住と^難難波が^葦葦
屋の里小嘯き申く人もあり或ハ源氏大將の跡を

伊勢物語を
よの星の川の
まうのひも
む方のあまの
たぐ火の

あひ^テ須磨より明石小浦傳ふ人もあり和歌吹あげ
玉津鳶月落ちうくるあまを^松松風をげき高
砂^下の波間を^浦浦路を^人人もあり
あり其中小後徳大寺左大將實定ハ舊都の月をこ
ひらびて入道よいとま^テ都へ上り給ひ^テ名
とり心^{風流}給へる人よてうき世の旅の思出ふ名
所々を問見そぞ上られ^テ千代小變らぬみど
りは雀の松御影の松^テ雲井よさ^テ布引ハ我朝
第二の龍と^テや業平中將の^テかの龍^テふて星の河邊の

求塚の故事ハ
 万葉集大和物
 語等小見えよ
 新古今集太
 上天皇みよこせ
 山本ゆきむみ
 みる川夕ハ秋
 とあふおひひ
 ん

螢のと浦路をくつふたがめりん下ソづくあやうん奈お
 ぼつ不審のな求塚とソくるハツカこひゆ急命を失ひ二
 人の夫の墓とや猪名ツルのみたるとのあけぼのの
 霧くもりこむるらやの松かあらば春うらあ〜ねど
 も山本霞むみたるせ川男山小まむ月ハ石清水小や
 宿るらん秋の山のりみちの色稲葉を渡る風の
 おと御身チド小まみてぞおほ〜りるさても都小入
 給ひヲかた〜こころを〜を見給へバ空〜き跡のそ多く
 してたあ〜残る門の内云行きかよふ人もあければ

浅茅が原蓬が松と荒れを〜鳥のふ〜ど〜あり
 二りり八月あのをの事なればまどよひあ〜ら出
 る月ハ主なき宿小獨をみテをりヲあ〜りがほ小鳴く雁
 の聲さ〜つらくぞきこ〜め下畧

壽永三年平家八嶋の旅の條 平家物語

不知作者或云
 信濃前司行長作

萩のうそ風もやう〜身ふ〜み萩の下露もいよ
 〜水あげ〜恨むる虫のこゑ〜水稲葉うらそよぎ
 木の葉うらちるけ〜き物思をざらんスだ〜よあけ

ゆく秋の旅の空ハ悲しうるべし。ちりて平家の
 ひとりの心のうち。推はせられてあきらめたり
 昔ハは秋の雲の上よて。春の花をゆてあそび
 今ハ九重八嶋の浦ふして。秋の月ニ悲しおよそ明き
 月を詠ても。都の今宵いづとあそんと思ひやり涙
 を流し。心をまきしめてぞ。明しくらきせ給り。
 左馬頭行盛

君をめば。くも雲井の月なれど。あほこり
 きは都なりなり

左少辨俊基朝臣二たび関東へ下向

路次の條 太平記

北小路玄慧等作

俊基朝臣ハ。七月十一日。六波羅へめし捕られて。
 関東へ送られたまふ。再犯赦さざるハ法令の定る
 所なれば。何と陳ぶ所とも赦されじ。路次あて失
 ちりこの鎌倉を斬らるる。二のあひごをばた
 ちられと。思ひ設りてぞ出られり。落花の雪
 小踏みまよふ。かゝ野の春の櫻がり。紅葉の錦着

軍記文の常おれど。此段むげ
 小詞づつひち
 へ。ソひうけの
 詞あつてハ。假
 字の違へまふ
 あれど。近き年
 ども。童子の常
 小口ささみよ
 も。誦さるるあ
 ば。そとまらふ
 たりいづつ。の
 のち。あつて。さ
 へ。ハ。假字の違
 へる所なり

千載集 俊成
 又。あつて。か
 の。櫻。の。花。の
 雪。ち。春。の。曙

拾遺集 公任卿
朝まじき嵐の山
のまむられはみ
みちのふりき
きぬ人やなき

てうへる。嵐の山の秋の暮一夜を明けほどだも。旅
ぬとあれバ物うき小恩愛のちぎり浅うぬ我
ふもさとの妻子をバ。ゆくへもまぐらおもひあき。
年久しくも住み馴し。九重の帝都をバ。今をかぎ
りとうへりみて。思をぬ旅小ソでたまふ。心のうち
ぞ哀ある。憂きをばとめぬあふ坂の関のまぐら小
袖ぬれて。末ハ山路をうちでの濱。沖を遙小見こ
せば。潮なうらぬ海小こつを行く。身をうき舟の
うきまぐらみ。駒もとどろと踏鳴に。勢田の長は

古今集 あふみ
と朝たもく
れはうぬのの
ふたぐをあく
なる明ぬこの
よハ

うち渡り。行きう人よあふみ路や。世をうぬの野よ
なくたぐも。子を思ふかと。哀なり。時雨もい
もる山の木の下露小袖ぬれて。風は露ちる篠原や。
笠こくる道をまぎゆけば。鏡の山ハありとても。
涙ふくもりて見えろく物。物を思へバ夜のまふも。
おいその森の下草小駒を止めをうへりみる。故
郷を雲や隔つらん。番馬醒の井。柏原。不破の関屋
ハ荒ちて。猶もる物ハ秋の月いつの我の身の
をけりあふ。熱田の八つるぎ伏拜み。まほひ小今や

バ兼久の合戦の時院宜うきくさうし 咎ふよて光
親卿関東へ召下されし宿めて誅せられし
時昔南陽縣菊水汲下流而延齡今東海道菊川宿
西岸而終命とかきくさうし 遠き昔の筆の跡今ハ
我が身の上ふなり哀やいとまきりらん 一首の歌
を詠じて宿の柱ふぞかかれける

古もかゝるためしを間きく川の同じ流ふ身をや
沈めむ大井川をまぎ給へオナジバ都ふあまし名をま
て亀山殿の行幸の嵐の山の花盛竜頭まうどうげき

伊勢物語まろ
があらうらの
山べのうら
よもゆめあり
人ふあそぬな
りなり

あ伊の舟よのり詩歌管絃の宴ふ侍りしことも
今は二たび見ぬ夢とありぬと思ひつゞけ給ふ嶋
田藤枝小うらまて岡べのまくむら枯れて物
悲しき夕暮小宇都の山べを越行けばカ葛楓いと
茂りて道もなす昔業平中將のまみ所を求む
とて東の方へ下りし夢も人ふあそぬあり
りりカとよみりしもかくやと思ひまくれり
清見がを過ぎ給へバ都ふへる夢をさへ通さ
ぬ波の関守ふいと涙を催され向下見いづと

の崎興津蒲原うちまぎて、あぐの高根をみとま
バ雪の中よりとら煙ヲ上たき思おくらべつ。明る
霞小松見ええ。浮嶋が原を過行けば、まほひや淺
き舟みえて、あまうら田子のみ身づのうも、うき世を
めぐる車づくし。竹の下道ヲゆきたるゆむ。足づく山の
こらげとら。大磯小磯見おろして袖の波ハこ
越嶺ゆるぎの急磯ぐとーもハあられども。日數積れば七
月廿六日の暮程不鎌倉小こをつき給ひられ

後醍醐天皇隱岐國小御遷幸の御をり

中宮御暇申の條 太平記

北小路玄慧等作

元弘三年
三月七日。まぐて先帝隱岐國へうらされさせた
あふときこえられバ。中宮ハ夜ハまぎれて六波
羅の御所へ啓たらせ給ひ中門ヲ小御車をきーとせ
られバ。主上出御ありて。御車の簾をかきげられ
君ハ中宮を都小とめあき奉りて。旅泊の波長
汀の月小流離さらせ給らんむ。行末の事を
思召しつらぬ。中宮はまこ。主上をまぐと遠

伊勢物語秋の
よの千よをひ
とよおなをり
も詞のらり
て鳥せまぐら
ん

嶋の外ふおひひやり奉りて何のためそのある世
ともなく明けぬ長き夜の心よとひのこちち長
き物思よなとんと共お語りつくさせ給ふ秋の
夜の千夜をひとよふなぞらふともあほこころを
残りて明けぬべし御心のうちをのうきほどハ
其言のとも及むねバなり^却ソひソでさせ給ふ
ひとあしもあし^た御涙よのそかきくれてづれ
なく見え^月有明も傾く迄よたりおろり^強夜
もまぐでふあけなると^ハづれバ中宮御車をめ

ぐらして還御なりらるる御涙の中ふ

この上のおひひあ^しづれあきの命よさるれば
ソのをうぎりぞとげ^りりまことえてあし沈ませ給
ひなぐらうる車の別路おめぐりあふ世のためみ
なき御心のうちこそ悲し^ハる

俊寛僧都硫黄嶋少て成経康頼小離別
の條 平家物語

都まぐ^田こそかた^田を^田とるせめてハ此船よのせて
不知作者或云
信濃前司行長作

達
し(ハ)元ノ誤
也

九國の地までつけて給へ。おのづかのうれおさ
つる程こそ。春ハつをめ。秋ハ田のもの雁のおとづる
やうおのづの故郷の事をもつてくまうつ色。今
より後ハ何そして。あきくべきとて。もどく焦れ
給ひりり。少將。誠おさこそハおぼしめをらめ。我
らごめ。還さる嬉しきも。さる事もてハ候へ
ども。御有様を見奉る小。更おゆくべきそらもお
ぼえ候も。此船ふるちのせ奉りて。上りたう
ハ候へども。都の御使。ソのうも。妙なうおよびき由

を頻小申し。其上ゆるされもなき小。三人あがら嶋
のうちをいで。あど聞え候も。なうくあ
う候ひあんだ。成経まが罷りのぼりて。ひとく小
もよく。申し合せ。入道相國のけしきをもう
うひむえ。小人を奉らん。その程は。日ごろおを
しつるやう小思ひなり。ておち給へ。命ハソのおも
大切の事なれば。たとひこの瀬小。をれさせ給
ふとも。つひおハ。あど赦免たうて候ふべきと
さあぐ。ふたぐさめのこまもども。僧都堪へ忍ぶべ

うも見え給えども。さるほどふ。船出さんと云々。ル
バ。僧都ハ船ハのりてハありつ。下りてハ乗りつ。あら
す事ごとをハ知ハ給ひハ。少將のめとみハ夜の衾。
康頼入道ハの形見ハ。一部の法華經をハ留めハ。
既ハ小纜解きて船ハおし出せば。僧都ハ綱ハおとりつきハ腰
よあり。脇ハおあり。たけの立つまでハひのりてハ。
長も及まばなり。ルハバ。僧都ハ船ハおとりつきハ。
あのおのく。俊寛をば終ハ捨てて。給ふの日ごろ
のなきけも。今ハあふらば。ゆるされたりハルハバ。

都ハおやハこハ叶ハ。はとも。せめてハ此船ハのせと。九
國の地ハまでハとくハどハのれハルハども。都の御使ハいハふも
うあひ候ふまで。取付き給ひつる手をひき
のけて。船をば終ハ漕出ハ。僧都ハせん方ハなハさハ小ハ渚
ふ上り倒ハれ伏ハしハをハさハなハきハ者ハのハめハのハとハやハ母ハあハどハを
慕ふやうハ不足ハ摺ハして。これ乗せてゆけ具ハしてゆ
けとのさハひハて。喚ハきハきハけハびハ給ハへハども。漕行く船の
ならひハひハて。跡ハハ白波ハをハうハりハなりハ。いハまハとハ遠ハら
ぬ船ハあるハども。涙ハよハくハれハてハ見えハざハりハルハバ。僧都ハ。

高き所小走り上^リ里^ノ沖の方をぞ招き^リの^ハ松浦
小夜姫^ノもろこ^ノ船を慕ひつひれ^ルあり^クん^モ
これ^ハハまぎと^トぞ^ミえ^ル程^ハ船も漕^ハ
く^ル日^ハも暮る^レども僧都^ハあ^ハの^ハ伏^ドも
う^ヘら^バ波^ハ不足^クち洗^ハせ露^ハ小^カを^ルて其夜
ハこ^トぞ^ミ明^ル

四條畷戦の時楠正行兄弟参内御暇申
の條 太平記

北小路玄慧等作

此段字音の詞
など多くてむ
げよこちあ
てつな^ルど
事^ハあ^リて
く情^ハあ^リて
ちみ^ハふ^ハ心^ハ
ま^ハく^ハお^ハ
ゆる^ハを^ハう^ハ
ル^ハ臣^ハ子^ハと^ハ
る^ハ者^ハの^ハ教^ハ
と^ハと^ハり^ハで
つ

正平四年
楠帶刀正行舍弟正時一族うちつれて十二月二
十七日芳野の皇居小参ト四條中納言隆資を
以て申^リる^ハ父^ハ正成^ハ尪^ハ弱^ハの^ハ身^ハを^ハ以^テ大^ハ敵^ハの
威^ハを^ハく^ハさ^ハ先^ハ朝^ハの^ハ宸^ハ襟^ハを^ハや^ハめ^ハよ^ハら^ハせ^ハ候
ひ^ハ後^ハ天^ハ下^ハ程^ハなく^ハ乱^レて^ハ逆^ハ臣^ハ西^ハ國^ハより^ハ攻^ハ上^リ
候^ハふ^ハあ^ハひ^ハ危^ハを見て^ハ命^ハを^ハ致^ス處^ハが^ハね^テ思^ハ定^メ
け^ハる^ハ小^ハを^ハり^テつ^ハひ^ハ攝^ハ州^ハ湊^ハ河^ハ小^ハして^ハ討^ハ死^ハ仕
里^ハ候^ハひ^ハ訖^メ其^ハ時^ハ正^ハ行^ハ十^ハ三^ハ歳^ハ小^ハ罷^ハ成^リ候^ハひ^ハを
合^ハ戦^ハの^ハ場^ハへ^ハハ^ハ伴^ハを^ハで^ハ河^ハ内^ハへ^ハ歸^シ死^ハは^ハ殘^リ候^ハを

十三天正本
十一とあり

んぢる一族を扶持し朝敵を亡し君を御代小つ
けおるらせよと申置きて死みて候ふ然る小正
行正時をぐて小壯年小及び候ひぬこのたび我と手
を碎き合戦仕り候をば且ハ亡父の申きて遺言
小違ひ且ハ武畧の云うひなき謗小おつぐくおぼ
え候ふ有待の身思ふよ任せぬあゝひめて病小
犯され早世仕る事候ひなばたゞ君の御為よは
不忠の身とあり父の為小は不孝の子とならば
きめて候ふ間今度師直師泰小懸合身命を盡し

合戦仕りて彼等が頭を正行が手よかけて取り
候ふの正行正時が首をうれら小取られ候ふ其
二の中小戦の雌雄を決すべき候へば今生小て
今一度君の龍顔を拜し奉らん為よ参内仕りて
候ふと申しもあぐ涙を鎧の袖よかけ義心其
氣色小頭れられバ傳奏ソよと奏せざる前よあぐ
直衣の袖をぞ濡し主上をなほち南殿の
御簾を高く捲せて玉顔殊ようらやうと諸卒
を照覽ありて正行を近くめして中正行頭を地

小つけチアレニセキとのりの勅答よ及ぢた。たゞ是を最期の参
内ありと思ひ定めて退出正行正時和田新發
意チカシ舎弟新兵衛同紀六左衛門子息二人野田四郎
子息二人捕將監西河子息関地良圓以下今度の
軍小一足もひらぎ一處よて討死せんと約束し
たり。兵百四十三人先皇の御廟よ参りて今
度の軍難儀あゝ討死仕るべき言シ暇申して如意
輪堂の壁板小ゆの名字を過去帳よ書連ねて
其奥小。

梓弓ハハ
トハルノマツ
ウツ

梓弓カハなまきスのび射小いる。
名をぞととあると一首の歌を書留め逆修逆修の爲
とゆへくカハて各鬘の髪をきりて佛殿小あげい
れ其日芳野をうちウツて敵陣へとぞ向ひる。

哀傷

二條院上皇崩御の條 源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

永万年七月
同二十八日小。新院かくれさせたるひふり。

されさせたまひつゝの。かぬて時をもあつめ
りるハアリケル。同十五日の夜。親王を左大臣經忠の亭に
移し奉らせ給ひ。三種の御寶を譲りおぼしまし。
御行末の事。いとこよあふ仰置れて。御劔と法華
經とを。左右の御手小物持一給ひテ。ソ十の月と共
小雲づくれさせ給ひりる。小附を従ひ奉りしひ
と。ハ唯闇路に迷ふこころちあん志給ひりる。御姿
を改め奉らる。如意輪寺の御堂の後の方。小を葬
め奉る。下

左府頼長公流矢に中里てうせ給ひりる
をり父大相國殿御歎の條 保元物語

葉室時長卿

殿下は御うほし御手をあてて。やく久しく泣き
たまひりる。さるふても言ひ置きりる事ハたう
りつる。いふ此の世死ふ志執むとまう事多うり
りむ。我我が身の死を死あふつけても。子共の行
末末を末おぼつたう思ひけめ。攝政我関白頼長をも
せさせて。今一度天下の事取り行ふを見むやと

こを思つるふ。命なごらへて。かゝる事を見るも。
前世の宿業コトの。かせんふソで。命を。しぬ兵モ必
しも疵を。やうぶることな。その上。今度は。源平
両氏の輩も。志の。るる。さうの。ハ。人も。う。れ。ど。こ。を
きけ。その外。月卿。雲客。北面。まで。参百川院り。籠。れる。者
多。う。り。ら。ふ。ソ。の。た。を。バ。左。府。一。人。あ。が。れ。矢。小
中。里。て。命。を。失。ふ。ら。ん。ソ。の。あ。る。者。の。放。し。ら。ん。矢
小。う。あ。ら。る。ら。ん。う。さ。て。き。よ。中。畧。あ。を。れ。取。り。も。か。お
る。物。た。ら。バ。忠。實。が。命。小。う。ん。て。ま。い。悲。し。き。可。な。換

蘓武が胡國小趣き。二。う。び。漢家。万里。の。月。小
の。へ。り。院。君。が。仙。洞。小。入。り。も。晋。室。七。世。の。風。よ。う。ん
り。き。頼。長。一。た。び。去。て。再。會。ソ。の。時。を。う。ち。う。ん
か。ひ。あ。き。命。ご。ふ。あ。ら。ば。た。と。ひ。ふ。へ。ん。の。る。ら。ん
小。行。ち。ら。と。も。忽。し。失。ち。ら。事。ハ。よ。も。あ。ら。ド。も。
東。國。小。た。ら。ま。よ。せ。バ。津。輕。や。蝦。夷。の。奥。中。で。も。遠。路
を。あ。の。ぎ。て。駒。に。鞭。を。も。う。ち。て。ま。い。も。西。海。小
左。遷。せ。ら。れ。バ。鬼。界。が。嶋。の。ち。て。ま。げ。も。船。小。棹。を
も。き。ん。べ。き。小。ゆ。き。て。歸。ら。ぬ。別。の。ち。悲。し。き。こ

とはなきぞとよ。計らざりき。是程小老の心をな
やめぬべしとはとて。御涙せきあへさせたまはぬ
を見奉るもあをれなり」

源為義の子天王丸船岡より失われし

時乳母の夫内記平太歎の條 保元物語

葉室時長卿

此君を手あれ奉りしより後。一日片時も離れ参
らざることあり。我が身の年の積ることをば思
ちげ。早く人とあはせ給へしと。あけくれ思ひて

やいなひ参らせ。月日の如く小仰ぎつるよ。只今かゝる
目を見ることも心の心うきよ。常ハ我が膝の上小を給
ひて。髯をなでし。ソノ人となりて。國をも^居莊をも
設りて。あらしせんむらんと。まひし物をと。假
とぬの寐覺する。内記々々。ととぶ御聲の。耳の底小
ととまり。只今の御まが。幻ふらげろへ。さくら小
忘るべしとも覺えぬ。是より歸りて命長くと。り
千年萬年をふもき。也死出の山。三途の川をば。誰の
ハ介志申はべき。怖しく思召さんよ。つけ

もあづけ我をこそ尋給ため。生きて思ふも苦しき
小主コナの御供仕らんとしひこととちてぎ。腰の刀を
ぬくまゝ小腹うき切てうせふらる下畧

傳

九條廢帝

本居宣長

九條廢帝ハクイダイと申し奉る奉は。順徳天皇の第一の皇子
少て御母ハ中宮藤原立子。東一條院と申は。後京

極攝政良經公の御女なり。帝。建保六年十月十日小
降誕。御諱ハ懷成と申は。同年十一月廿一日小親王
宣下アリ廿六日小皇太子小立ち給ひ。兼久三年四月
廿四日小御年四四して受禪あり。然るところ小東
のぬき賊むじと北條義時甚いづく荒びてゆ思くま世の
みどれウカおろりてかの族泰時時房なごし。賊ど
もかー上里。同トトき六月小京小乱入りていとも
か多ー恐らる。三所の天皇うちを遠所小遷ト奉り。此
の新帝イマニカドをもおトおろし奉りぬるハ。あさトしトな

どもとのつねの事をいへ言をむ方あきさこの
しは事のまごのこともぞ有りけるかして此の帝ハ
其の七月九日小位を譲らせ給ひてひそこのふ九條
院に渡御ありそきより此の院に御母女院と御同
居まゝして文暦元年五月廿日に崩御御年十
七もぞおとすゝるいよご御元服の儀もあを
しよふまき受禪あまゝいよごも僅小四月がほど
小あまさせたやひていまご即位の儀も行をれ
ぎりしを皇代の御數も入らせ給をぎりた

りソグきのようころよの葬り奉りらむ御陵の在
處も聞えぬハい^地ともうこき御事小^{御子}は崩御ありし年小法印性慶の女の腹小姫宮ひ
とくころ生れさせ給ふ義子内親王と申に弘長
元年三月八日御年廿八もて院号かうぶりたまひ
て和徳門院と申しき

冬嗣大臣 大鏡

藤原為業

左大臣冬嗣の^{大臣}か^{大臣}ハ内磨のか^{大臣}の三郎公卿小

て十六年左の大臣の位よて六年^{オシキ}田村の御^{文德帝}おほせ
 みておそしおほかむの故よ嘉祥三年庚午七月
 七日贈太政大臣ふなりたあへり開院大臣と申は
 このおそしおほくをのこ子十一人おそしたるな
 りされとくごり^{ハコウコシエ}きをんたごたちのことハくは
 ー知里侍らばたごし田村のみ^帝の御母后贈
 太政大臣長良のおそし太政大臣良房のおそし左
 大臣良相のおそし^腹ハひとつ御はらなり

長良中納言 大鏡

藤原為業

贈太政大臣權中納言從二位左兵衛督長良卿ハ
 冬嗣のおととの太郎母ハ白川大臣^{フ女ニテ}西三條大臣小お
 たり公卿よて十三年陽成院御とき小^祖おほぢ小お
 ちまむるの申あよ元慶元年丁酉正月小贈左大臣正
 一位^{三モラル}よと贈太政大臣^{三モラル}枇杷大臣と申は^{コレハ}ひが事う此お
 とし御子六人おそし^祖其中よ基經のおそし^祖まぐ
 れたまへり

縣居大人

本居宜長

何がとあるの大人は賀茂縣主氏よりとほつあや
は神魂神の孫鴨武津之身命より八咫鳥遠祖となり
て神武天皇を導き奉りたすひー神あること
姓氏録に見えくはあごごご。此神の末山城國相
樂郡岡田賀茂大神をもちつ大分。師朝といひー人
文永十一年小遠江國敷智郡濱松庄岡部郷ある
賀茂新宮をいつきまつるべきと。此詔を蒙り
て彼の郷を賜ちり。まなはち彼の宮の神主

花
地

よなきる。此の事引馬草小見え又論旨の如く
なる物あり。又乾元元年も詔をかうぶりて。の
岡部の地を領ぜるガ。これハ正一キ論旨ありて
家小傳れり。かくて世々の神主たりーを大人
の五世の祖政定といひー引馬原の御軍功あ
りて東照神御祖君より來國行かうちくる刀
と丸龍の具足とを賜りぬ。この事は三河記にも
見えくり。さて大人は元祿十年小此の岡部郷小
生れ給ひて。つこのり。古學小あつ

心をよせし。享保十八年小京小のぼりして。稻荷
の荷田宿祢東磨、大人の教をうけ給ひ。寛延三
年小江戸小下り給ひて。その後田安殿小仕奉り
給ふ。この殿より。葵の文の御衣を賜をり給へる
時の歌。あふひてふ。あやのみぞをも。うぢびとの。
かづのむりのと。神や志をうむ。明和六年十月晦
の日。と一七十三少てみよぶ。り給ひぬ。武藏國荏原、
郡品川の東海寺の中。少林院の山小葬る。こは。大
人の弟子なるは某が志を。く。く。く。ふと。り。志

るせり。なるほ父ぬ。母とドあどを。も。志る。は。べき
ものあるふ。も。れ。たる。は。又。と。く。あ。り。た。ら。ん。人。小。と
ひき。く。て。志。る。は。べ。く。な。ん。

和文讀本卷三終

松田

和文讀本卷四

九曜文庫

嶋氏藏書

稻垣千穎輯

評論附

四時をゆくの評 徒然草

ト部兼好

をりふりの移りうもこそ物ごとにあつ事なれ
物のあはれ秋こそまよふと人毎ふいふあまこと
それもさる物にて今一きは心も浮らるもれは春のけ
しきよこそあめ鳥の聲などもこの外に春めき

古今集
五月まの花を
はなのうをか
げば昔のく
袖のちぞもろ

紫賀茂の祭
五月四月に行ハ
る國祭祭祭祭

てのどやのあま日影に垣根の草をえ出る頃よりや
春深く霞渡りて花もやうくけしきどこのほどこそ
あま折しも雨風うちつゞきそ心あつたごとく散過
ぎぬ青葉ふありゆくまで方にこころをのぞきなや
ちか花橋は名ふこそたへまなほ梅の匂ふ古の
事も立歸りこひしう思出でらる山吹の清げも
藤のたばつのなきさま志こもさぶ思ひをそ難き
事多し灌佛の頃祭のころ若葉の梢すくげに茂
りゆくほどこそ世のあまも人のこひしきもまよ

どやうし
世のあま云
々ハ花見や訪
ひ人も散過
て後いづれよ
いなり

六月被六月
晦日の大被

れと人の仰らまへこそげにさる物あま五月あま
ゆめ頃早苗とも頃くひかのたぐくなど心細く
ぬくみみ月頃あまき家に夕顔の白く見え
て蚊遣火あまもあまをまなす六月被又をのし
七夕あまもあまめりけれやうく夜さむに
なるほど雁鳴きそ来るころ萩の下葉色づく程に
さ田くりほさをとどりあつくること秋のこを
ねほろ又野分の朝こそむりしきいひつぐくまは
皆源氏物語枕草子などに事ありしれど同し事

今さらみいそとイ海あもあひたほ思き事いそぬい。
 腹フふくもくさあまは筆コ文ハにのせつ思あぢきなき
 ささびあてりいやり捨つべき物あまひ人の見るべきに
 もあらど一さそ冬枯のけ一きこそ秋に一をさくおと
 るまど一れ汀の草に紅葉の散どまりて霜いと白
 うたける朝た遣水より烟のたろ一そをりしけま
 年のくまはけ一人毎に急ぎあへる一そぞす一あ一く
 あまれなる一す一ま一き物あて見る人も一なき
 月の寒けく一す一る一廿日あまりの空こそ心細き一を

のなき御佛名荷前ノ前キの使一らあどぞあひまにやん一
 となき公事コシどもあげく春のマウケクいそぎま一りう一さねて
 催一行一らる一さやぞいみ一きぬ追儼ウヤラヒより四方拜に
 つく一そねり一あけれ晦ウの夜い一う一きた松ど
 もどりて夜半一まどる一音で人の門カた一きけし重
 ありきそ何事一にのあらん一ことぐ一の一まそ足を
 空一に一す一ど一ふ一ぐ一曉方よりさみぐ一よ音なくありぬる
 こそ年一れあど一りも心細一なき人一のくる夜とそ
 魂一ま一つ一る一わ一づ一は一この頃一都一に一いた一なき一を一あ一づ一ま一の一方一に一ハ

佛名八十月十
 九日一り一世日
 禁中にて
 荷前一八十月言
 日一を撰一て一陵
 四墓一奉幣一定
 事一を一公
 追儼一の一晦
 日の夜一南殿一の
 邊一に一殿上人
 行一ふ一年中一の一度
 氣一を一拂一ひ一て一春
 陽一を一迎一ふ一意
 方一拜一正月元
 日の曉一に一主上
 清涼殿一の一東階一に
 て一天地一野山一陵
 を一拜一せ一ら一る一
 儀一式一なり一
 な一き一人一云一々一七
 月一十四一日一魂祭
 晦日一に一魂祭
 せ一ら一る一

猶もる事にてありしこそあてきありしこのくくして
明行く空のけしき昨日みくもりたりとは見之ねど引キクニ
くがぐりしきこちぞする大路のさす松たて渡し
て花やうよ嬉テしげあるこそすこほされた也

人のうまれつき

本居宣長

人のうまれつきさすやどあるものなり物の義理
事の利害あどすべて万の事を心にいよとさすへか
がら口にい得いとぬ人もありすこ口にいよくいへども

志の行ふこといせぬ人もあり又口にいよくいへども
文にも得つきいでぬ人もありまこと口にいよはえのいね
ども文よはよく書出る人もあるあり

人のあるまひ 十訓抄

不知作者

まべて人のあるまひハ重らりりみ詞ぞくなめて人を
もな狎くさび人にもあつさきすたふおき好まひた
とあしくさあまひて居れば心の中はあら
び他ヨリよきものなと見え人にもあつれ所をも

越え居る

たのしみあり。うきまど是は。たつくく思け。き方
に。あつた。みざるべき所。に。をりに随ひて。戯をも
劇。せう。き事も。ひ。人のたごうを。も。友に
志。ごふ心。あつて。より。なく。たのしみ。は。徳多
くり。と。古き人。多く。さ。めら。る。又人は。用意ふ
く。て。出仕の。と。心。な。れ。なき。を。と。ん
公事につけて。失禮を。も。う。ち。あ。る。ま。ひ。あ。越
度のい。で。き。つ。る。人。と。あ。を。き。事。な。り」

文うくこと 徒然草

ト部 兼好

手の。ま。り。き。人の。は。ぐ。く。ひ。文。り。き。あ。る。を。見
ぐ。と。と。て。人。に。く。ま。る。い。ら。る。さ。り」

富貴をねがふをよき事にする論

本居 宣長

世々の。あ。か。し。や。身。の。貧。く。賤。き。を。う。き。へ。ひ。と
と。榮。を。ね。が。ふ。よ。ろ。こ。ば。ざる。を。よ。き。事。に。す。ま。ど
も。そ。の。人。の。中。の。事。の。情。に。あ。ら。び。多。く。名。を。む。さ。ぼ
る。例。は。偽。なり。ま。れ。く。ふ。さ。る。心。な。ら。ん。者。あ。り。とも。

こころを本
はこころむと
あつを引直
しつ出た

はつらうれおふべきことをなりといひけきば、と人
げふと^カかゝるりて世にいみじき事に思ひあへると
ぞ^{イニ傳タル}「今たのふたふいとをどがすきことなり暑
きことあぢびとてことよよりていたどり志の喘ぐ
ことをもなをらん又さばかり陰陽のとこれひ残心に
うけとらん^{下キ}は常にうづらうみるべきことと
あるふたまき道くひよ此の牛れさまを見てゆかり
なくさとりうづらふおぞや^アこの牛の喘ぐを
みだばあぢびをむべきよ^アやさればこの實にと思ひ

ていつるにわあぢで人にいどき事に思はせんと
てのつくりごころにこそありき^アまことよ志
り心得とらん^{下キ}にもいふひあき忘れものあるをよ
にいとどくある一傳へるもいと^痴ととなり「又も
とより陰陽を調ふなごいふおとあるべくもあぢ
まべて世の中此事の時々の天地のあるやうも何も
皆神のみ^{御所為}こごにそ時の氣のうなひかおもぬあ
ど更に人のあるべきことよはあぢぬをうくことと
しげにいひかをもいすべとられ國人のあぢひもい

とくちちくくうるさきつどなりく」

説解附

世の中の語を一切に虚言多きこと

鈴木倫庸

げあときく^{然ラン}中^{一語ノ}によく思へば、ことわりを^一空言^實ある^ガ一何國とやらん^{三テ}友^理どもち集りて、船遊びもること侍りたり。酒飲と連歌し、謡ひ舞ふ^問ぼんぼん、覺之び遥の沖に漕出でしに大^キなる魚い

で来て、それ船を呑みけり。船の人ども驚きて、こい^{ヨリテ}らに俄ふ日くれたるぞや、い^甚くら暗きふ火と^{ヨリテ}りてよ。な^言どいひ^合ちひけるに、かの魚^甚と船をの^誑て海の底ふいりたれば、人ども皆歸らびなりぬとぞ^{ツクハシ}「この事げにときくらちに魚の呑みこも、海の底ふ入りたる。い^{ヨリテ}くら暗きた火と^{ヨリテ}りてよ。な^{テスマ}どいひ^テこと誰^テりきて傳へん。人ども皆歸らびと^ハいふことわりいとを^ハの^ハ世に傳ふるま^ハれ^ハぐ^ハくら^ハこの類た^ハわ^ハ」
後の世いはづの^ハき^ハ物^ハあること

本居宣長

安藤為章が千年山集といふ物に契沖の万葉の注
釋をほめて彼の顯昭仙覺がともぐさといふこの大と
こになぞらへば阿久も驚駘ふひとといへるまこと
とよさることありしなり。そのうち顯昭などの説に
くらべといふかの契沖が釋當時加ふべきゆゑなく事テの
きりうとぞたれもたほえけんナル今やこのこの縣
居大人ふくらべて見れば契沖のともぐさもすこ
驚駘にひととぞいふべうりけるコレミナラズ何事もつき

くふ後の世のこととぞうき物ありけり

苗字

本居宣長

藤原源をどの世に同ド氏の人數をび多うればそ
の内を苗字として分ざまはしと紛はしきまはしにつ
ねふその苗字をのこしよびあひてむね旨と存する
あまたのづから必然るべき勢にして今はこの苗
字ぞ姓ルサの如くなれりければ姓のあはれざらん人
あざと苗字を正しく守るべきことありし

てこの苗字は苗の字ナモなり。なまことなり。こゝも
と名字なりけんを志の書てい。名又あまなまざ
る。故ふがきくたる物なるべし。名字とりんも當
れる字にいひゆるがれども。中昔に名をも。又姓と名と
をつねても。廣く常に名字といふまは。姓の小分こ
けをも。同じく志のいひなりへり。あり。まこと今の
人たの事とも。父の事をも。同苗といふ。こま
も本同名にて。同姓のよりなり。」

みなむまび

徒然草

ト部 兼 好

みなむまびといふハモヤウ糸を結びくをねたるの。みま
といふ貝に似されいふと。あるやんごとあま人蝶れ
あせらまよき。にをといふいあやよりなり。」

白拍子

徒然草

ト部 兼 好

多、久助が申しけるト。通憲入道舞の手の中に興トひ
る事どもとえらびて。磯の禪師といひける女みを
へくまをせたり。白き水干にさう翰まきを卷をさせ烏帽

子とひき入るり多き。男とひき入る云ひける。禪師が
むき免志づるといひける。この藝をつげり。是白拍子
の根源あり。佛神の本縁をうたふ。其の後源光行
たほくのこころをつくまら。後鳥羽院の御作もあり。
龜菊にをくへさせ給ひたる也。あり

新にいひひでとる説ハ頼に人のうけひか
ぬ事

本居宣長

大うと世の常ハ異なる。新き説をおこひとせに

はよき^説はよき^説をいひぬ。先ひととせり。世中の學
者に惡まきそ。らるるのあり。あるはたのぐを
とより^傳來つる説と。以て異なる^説をききていよ
き^説を味ひ考ふるまでもなく。始よりひき^説
るにすて。とりあげざる者もあり。或ハ心のうちあ
はげに^{ミカ}とね^處も多しあるものら。さんぐ
に近き人の言ハ從をむ事のねとて。よとともあ
しともいふ。たぐうけぬ顔。志て過ハ類もあり。或
ハ嫉む心のすめ^人心^信にのよと思ひたる。それ

中の疵を強ふりとり出で、すべて説といひげとむと
構ふる者も有りテ大くテ舊き説をば、十テ中テに七テ八
いテらテしテきテをもあテしテきテ所テをば覆テ匿テして、僅に二テ三テ
の取るべき所のあるをとりとて、力の限助け用ん
どテ。新説しテきテの十テに八テ九テよテくテても、二テ三テのテこテろテきテこと
をいひたて、八テ九テのよテきテことをもおテけテちテて、力の
限テハ、我も用あテぐ、人にも用させテどテとをテもテこテハ、大くテ
の學者の習なり、然まテづテも、又まれくテハ、新ある説
のよテきテをきテては、舊説きテがテあテしテきテこととをさテらテりテく、

速に改め従ふ類も、あテきテはテも非テび、舊説きテ改テめテのテあテや
思ひて、かテハ、あテどテりテとテあテでテハ、思ひよテきテども、自定む
る力なくテて、疑テはテしテあテらテさテて、あテどテハ、新ある
よテきテ説テをきテて、いテらテくテて、こテそテいテやテいテみテどテくテよテら
こテびテつテ。忽テにテ従テふテたテぐテひテもテあテりテらテしテ」大くテ新ある
る説テハ、以テのテによテくテても、速にテ用テるテ人テまテまテあテるテもの
たテまテどテよテきテハ、年説をへテても、たテのテつテあテらテつテひテにテ世テの人
の従テふテまテれテあテて、普くテ用テらテるテれテば、その時に至りては、
初テにおテこテそテいテまテしテ輩テも、心テにテ悔テしテくテ思テへテど、た

く是ばせし從せんも猶おそく人已ろくたほえそ。
快くびあがりふるき一説を守りて止む輩も多う
り一志の世の中の論定りて皆人の從ふ世になり
てふ。初より速に改從ひつる人へ賢く心ごとく
思ふを舊一説きより拘泥づらひて、せとく滞れる人は
心鈍れそくひふひあく思ふをくつどぞその一」

師の説になつたまざる事

本居宣長

わの多古典をどくも師の説と違へること多く師

の説のころき事あるをば辨へひふくとも多う
をいとあるやどきこと、思ふ人たあのをきこと。
こをすふはち我が師の意にて常に教らまへ
ハ。後ふよき考のいできたらん一ハ。必しも師の
説に違ふとて、な憚りそとらん教られし。こ
はいと尊き教にて、この師のよたすくを給へる一
あり一。大か古を考ふることをさらし一人あり
の力もて悉明らめ盡くべくもあふび。又よき人
の説ならんうらよ。多くの中は誤もあどのを

うらむ。必^レるべきこととも交らざる得あり。其のた
のう心には、今ハ古のころ悉明らりあり。こと^レ成
れき^レて^レある^レべくもあ^レら^レびと思定めたることも。
思の外に。又人の異あるよき考もいでくることと
あり。あま^レこの手を經るあま^レく。さき^レの考の
上をなほよく考へきはむるか。つぎ^レに^レくは
しくありもてゆくこととあま^レば。師の説ありと
て。必泥み守るべきにもあ^レらず。よき^レ一^レ説^レを^レ以
て^レび^レび^レ古きを守ら^レる。學問の道に^レい^レふ

かひあきこととなり。又たのう師などのことあき
こと成いひあ^レる。い^レとも^レり^レこと^レい^レあ^レま^レど。
そ^レも^レい^レま^レざれば。世の學者その説に^レま^レど^レひ^レと。
長く^レよ^レきを^レと^レあ^レる^レど^レあ^レり。師の説あり^レと^レい^レて。こ
ろきを^レあ^レり^レた^レど^レい^レま^レび^レつ^レか^レく^レて。よ^レき^レま
に^レつ^レく^レら^レひ^レを^レらん^レハ。た^レど^レ師を^レた^レく^レ尊みて。道を
バ思^レま^レざる^レなり。宣長は。道を尊み古を思ひて。
ひ^レま^レら^レに道の明ら^レり^レた^レく^レん^レことを思ひ。古の
意の明ら^レの^レなら^レん^レことを^レむ^レね^レと思^レふ^レの故に。

私に師を尊むことわりのうけむ事をば得しも
かづりみざることをある哉。なほ己ありて誹らん人
ハそしつてよ。そはせんうとありし。されハ人に誹ら
れどよき人にあらむとて道をあげ古の意踐
まげてさてあることいえせむあることすすあし
わが師の心をまじく却りてハ師を尊むありべ
くやハアラバそハいふありハアラバあれ

教訓 誡附

心を一方にむくべきこと

徒然草

ト部 兼好

ある者子傳信を法師にやして學問して因果の理を
もたし説經をどして世わさるたがき便もせよと
いひければ教のまじに説經師にあらんとめに馬
みのりなすひけり興くるまもたぬ身の導師に
請ぜらまん時馬をどむりへまおとせとらんヲリふも
いぢり曲にて落ちあんハ心ヲトう迎のるべしとたひひけ
り次に佛事の曲後酒あどむむることあらんヲリふ

法師のむげに能なきは。檀那をさま^冷ま^テしく思ふべ
しとて。さ^早うか^歌と^早いふことを習ひけり。二のうごや
らく境ふ入れきば。いよくよく志たくたほえて。
嗜みけるほどよ。説經をらふべきひまなくて年
よりに^三ま^三この法師のにもあらひ世間の人。
あぶ^二このことあり。若きほどは諸事につけて
身をたて。大なる道をも成し。能をもつき。學
問をもせん。と行末久しく。あ^豫ま^豫事ども心に
は^緩けあ^緩が^緩る。世をのど^緩ら^緩に思ひて。うちた^緩った

りつゝま^三が^三さ^三あ^三りたる。目の前の事^三に^三ま
ぎ^三多^三て。月日を送れば。こ^成と^成ぐ^成た^成り^成事^成あ^成く^成し^成と。
身の老ぬつひふ物の上手もあ^成ら^成び^成思ひ^成し^成や
うに身をり^成び^成。取返さ^成ゆ^成。齡^成な^成ら^成ね^成を^成。走^成り
て坂を下る輪の如くに衰へ^成ゆ^成。されば一生の
うち^成に^成む^成ね^成と^成あ^成ら^成ま^成ほ^成。き^成事^成の中^成に^成何^成ら^成ま^成さ
ると思ひ^成く^成く^成。第一の事を案^成ト^成定^成めて^成。ろ
の外の思ひ捨て^成。一事を^成て^成げ^成む^成べ^成し^成。一日の中^成に^成
時の中にもあ^成ま^成す^成この事の來らん中^成に^成。を^成こ^成し^成も

益のまさりん事をいとなると。その外をばうち
まて。大事を急ぐべきなり。いづかをも捨てし
と心にとりもちて。一事もあつらひ一たとへば
碁をうつ人。一手もいづらにせび。人にさきごち
て。小をすて大につくごとし。そまにとりて。三
の石をもつ。十の石につくこといやま。十をす
て。十一につくこと難。ひとのなりともまより
ん方へこそつくべきと。とをまごちぬ事ばをし
くたほえて。多くまごぬ石にいくあく。是を

もすて。彼をも取らんと思ふに。彼をも得ん。
こ事を失ふべきあり。京にすむ人。急ぎて東
山に用ひて。まごにゆきつき。とりとも。西山にも
きそ。それ益やまごべきこと。我思ひ得た。門
より。歸りて。西山へゆくべきあり。こまご来つき
ぬ事ば。この事をば。いひてん。日をさぬ事なれ
ば。西山の事へ。歸りて。又こそ思ひたぬ。と思ふ故
ふ。一時の懈怠。まかると。一生の懈怠となる。こ
を恐るべし。一事を必なると思は。他の事は

破るをもいふむべからば人の朝をも耻づべから
に萬事に久びして一の大事ある處から人を
のありとありける中あり或者^{十寸穂}のほのまきま
そほの薄などいふことあり^{渡邊}のひだり^聖
の事を傳へ知り^{麻穂}と語りけるを登蓮法師其
の座に侍りけるが聞て雨のふりけるに蓑笠や
あるが^{アハ}給へう此薄の事習に渡邊のひとまの
がり尋ねまのらんといひたるを^許ありに物
騒^{ユキモ}雨ゆ^{ユキモ}と人の^{ユキモ}いひけまばむげの事

をも仰らるる物とな人の命ハ雨の晴間をもま
つ物うは^{マクシ}我も^{マクシ}あま^{マクシ}聖も^{マクシ}う^{マクシ}せ^{マクシ}あ^{マクシ}ば^{マクシ}尋^{マクシ}ね^{マクシ}ま^{マクシ}て^{マクシ}ん
おと^{マクシ}そ^{マクシ}走^{マクシ}出^{マクシ}て^{マクシ}ゆ^{マクシ}き^{マクシ}つ^{マクシ}習^{マクシ}侍^{マクシ}り^{マクシ}に^{マクシ}たり^{マクシ}と^{マクシ}申^{マクシ}一
傳へたるこそ^{マクシ}ゆ^{マクシ}く^{マクシ}あり^{マクシ}ごと^{マクシ}う^{マクシ}覺^{マクシ}ゆ^{マクシ}き^{マクシ}敏^{マクシ}き
ときは則功ありとぞ論語といふ^書も侍る
ある^{マクシ}の^{マクシ}薄^{マクシ}を^{マクシ}い^{マクシ}ふ^{マクシ}が^{マクシ}り^{マクシ}く^{マクシ}思^{マクシ}ひ^{マクシ}ける^{マクシ}や^{マクシ}う^{マクシ}小^{マクシ}大^{マクシ}事
の因縁をそ^{マクシ}思^{マクシ}ふ^{マクシ}べ^{マクシ}う^{マクシ}り^{マクシ}ける^{マクシ}」

頼むま^{マクシ}ど^{マクシ}き^{マクシ}こと^{マクシ} 徒然草

ト部兼好

萬の事はたのむるべからず。愚ある人の深く物を
たのむゆゑに。うらみいひある事あり。いきほひあ
りて。たのむべからず。こそき者まづほろぶ。
財多しとて。多むるべからず。時のちよ失ひや
そ。才ありとて。頼むべからず。孔子も時にあ
て。徳ありとて。たのむべからず。顔回も不幸な
りき。君に寵をもたのむべからず。誅をうくるこ
と速なり。奴をこがへりて。頼むべからず。をむき
は。も事あり。人の志をも頼むべからず。必變ひ。

約をも頼むべからず。信あることすくなし。身
をも人をもたのまをせば。是ある時のよあり。む
非あると知らうらみ。左ひ右ひあけき。障らひ。
前後遠く。せば塞がらむ。せむきこと。ひひ。げ
く。心を用あること。すこし。きあ。てき
び。き。時の物に。さ。ひ争ひや。ゆる。て
やはら。ある時の。一毛も損せ。人の天地の靈
なり。天地は限る所あり。人の性何ぞ。天地の靈
ん。寛大にして。極らざる時の。喜怒。こと。に。さは

らずして物のとありまづらてん

人をとりあつうふこと 十訓抄

不知作者

よのつねふある人のてづよく心づきなく見ゆる
尋常 不覺に思慮なきを人の前にいづる事ハ
こころともすまじき事ぞが。さう阿らうて人
なき時ハよく教へ誠めてあるべきやういひ
去らせ取いぞせるにその上なほ過をも僻こ
とをも去いづるハさたのひつる事とて云ひるけ

信記尊客
前不叱狗

ればさそこそあまを内はてい云ひも教へた
うで人の前にて聲をたて。さのなも腹たうあ
そ人め見苦しくまて其日の事もさむるこ
ちをれそまに從者も相そくとつぎぐくのべ
あまあつひさる事主にたたらびあけまら
らどの前あ犬をどよもいさうかやどとこそ文
にもとえたれまて人を勘當一興をさまのき
んことあるべきにあまかやうの事は汗あ
あまこと多う一人によりあひてさうべき遊をど

せんはたどひ身にとりて安からば口をきき事
あひよりとも構へて其日のさほりあらせども
はうらふべきあり其人のありて志のぐの事さあ
あきさしとらふ口をききことなり然れば行くぬ
ささよりはうらひあかるべき所へいさし出ぬ
あは志あり善悪をはうらひて交り居るん後に
へたほろげあぬ身のいづらにならぬべき程の
きんあるべく事なきさまにいひあし戯れもあ
しとたどなりくさきなりいさめんやとあ使ん

人のあやうらん今せのみさひなむこ
と見苦くさきことありうやうのかさ
福原大相國禪門いみどりける人ありをりあ
しにぐくも事をきども其主の戯と思ひ
てあつるをばくれのとらひあをくくぬ事
をもわらひいうゆる過を物をうちあし
あきさしききごとをききどもいひがひあしと
あらしき聲をもたてび冬寒き頃の小侍ども我
が衣の下にあせとつとりていりましが朝い

ればやをらぬけいぞ。たのふばくりねさせけり。
召仕も及ぶぬ末の者なまども。それの方様の
者の見る所にては人くびあるよ。をめて外
給ひければいみじき面目にて。心に志とてうき
しと思ひきり。かやうのなきけり。ありとある
たぐひ思ひつきけり。人の心を感ぜしむとは是
なり略下

楠正成兵庫下向のをり櫻井驛にて子

正行に遺訓の詞 太平記

北小路玄慧等作

正成此上はさレ此レ異議を申し不及むレ。五
月十六日に都をこちて。五百餘騎にて。兵庫へぞ
下りける。正成こまを最後の合戦と思ひければ。
嫡子正行が。今年十一歳あき。供あうりるを思ふ
やうありとて。櫻井宿より。河内へうへ。遣はとて。
庭訓を残しけるトバ。獅子子を生みて三日を經
る時。數千丈の石壁より。これを投ぐ。其の子獅子
の機分あれば。教へざるに中より。跳ね返りて。死を

庭訓
テイカン

ることを得びといへり。況んや汝既に十歳に餘りぬ。一言耳にとゞまらば。我が教誡不違ふことなからむ。今度の合戦。天下の安否とたのむ。今生にて汝が顔を見んこと。是を限と思ふあり。正成を以て討死をときくれば。天下に必將軍の世に成りぬと心うべし。然りといへども。一旦の身命を助らんがため。多年の忠烈を失ひて。降人に出づること有るべし。一族若黨の一人も死残りてあらんほど。金剛山のほとりに引籠りて。敵

寄來らば。命を養由が矢さきり懸けて。義を紀信が忠に比せ。是ぞ汝が第一の孝行あらんぞ。となくく申し。含めて。各東西へ別まにけり。

為輔中納言の諭 古今著聞集

橘 成 季

為輔中納言の口傳にうきまて侍るある人。屏風のやうなるべきなり。屏風は。うきまは。うきまのべつきは。うきまのなり。ひどをとりてた

つまびくさふるゝことれ。人のあまりにけらるは
しくありぬまじ。えたもくび。屏風のやうなひど
あるやうなれど。實^得らるはけ。まじうたもつなり。と
侍るとも也。「スレハ」

人の上いふを誠むべきこと

十訓抄

不知作者

人は慮なくいふやうき事を口とくいひ出。人
の短をそくを言ふことを難ト。くひことを
あはれ。耻^チのま。まことをたひ。これら

べくあるやうきことあり。我のなまことあり。い
ちうして。たのひもいさざるほどよ。いそぐ人
をひつめて。いきどほりあはく成ぬまじ。をのま
るに耻^チをりあはく。身はつる。あはく。大事に
もたよふあり。あはく。の中の劔は。さくで。たえ
おそるべきものぞあり。心得ぬことをあ。さやよ
難トつまびく。あへりて身の不覺あらはるものか
り。大く口からきくまのよありぬまじ。それぐ
み。それ事^補なきらせそ。うの者にあ見せそ。なま

いひて人ふ心たのれへだてらる。口をコトしゝるもべ
し。又人のつゝむことのおのづからもれ聞えたる
おつけてまゝのれいなナニガあどナニガうナニガごナニガもれむコトハ面
目あつるコト。あどナニガまナニガかナニガごナニガのうナニガ人をコトつコトむ
べし。多言止むべきなり」

知至顔に物いふまじきこと 徒然草

ト部兼好

何事も入りたるぬさ入メニまコトあコトるコトぞよコトきコトよコトきコト人の知
りたる事コトをコトさコトれコトとコトあコトりコトがコトほコトよコトはコトいコトふコト田舎よ

り出さる人こそ。一方の道に心得たるよコトのさコトり
いコトらコトいコトまコトれコト。さコトもコトをコト世コトふコトたコトぐコトきコトくコトもコトあコトま
どコト。さコトづコトのコトもコトいコトみコトとコト思コトへコトるコトけコトきコトかコトこコトなコトあコトり。
辨へたる道にも必口たもくコト問コトをコトぬコトりコトいコトぬ
こそいみじけれ」

楠正成の妻子正行に教誡の詞 太平記

北小路玄慧等作

今年十一歳になりける帯刀父が首の生きたる
し時にも似ぬ有さる。母が歎のせんくコトもコトなコトげ

世カ
タテハ
タテハ

菊水天正本
に菊作とあり

母急ぎ云云
の下異本は
正行腹を
とけを若
黨押す母に
告申とあり

あるさまを見て、流るゝ涙を袖にたぎへて、持佛堂
のかゝり行きける哉。母怪しく思ひて、正をかつち妻
戸のうらより行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時か
たゞよ留めり。菊水の刀を、右の手に拔持ちて、袴
の腰を押さげ、自害をせんとぞ。記念居りけ
る。母急ぎ走り寄りて、正行が小腕を取附きて、涙
を流して申しけり。梅檀は二葉より芳いと
へり。汝をさるくとも、父が子なれば、是程の理に
迷ふべきや。コトナク心にふもよしく、事の様を思て見よ

なしく諫め云
云の下異本は
いともなほ
しもくもなる
べぐらき目
重ねて見せん
より我を先
殺せよとせ
たえこられけ
ねばさげ正
行幼少心に

か。故判官が兵庫へ向ひり。時、汝を櫻井宿より
返り留めり。事は全く迹をとむらへれん為にあ
らび、腹を切きとして、残置きに非ぞ。我たどひ
運命盡きて、戦場に命を失ふとも。君いづくも御
座ありと承らば、死に残らずらん。一族若黨ども
を扶持しおき、今一度軍を起し、御敵を亡し
君を御代にもしませよと云置し所あり。
其一言つがさよきして、我にも語る者ぐ、いつた
ほどお忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはせ

げにもと思ひ
ついでつゝ自害
の事なみに
直とありもあ
り

君の御用ふあひ参らせん事あるべしと覺えんと
あしく諫めどもめて、抜きたる刀を奪ひとせば正
行腹をも切りえぬ、禮盤の上より泣倒れ、母と共
よぞ、歎きける下略

自満の誠 徒然草

ト部 兼好

一道にたぐさはる人、アガミあらぬ道のむしりに臨みて、
あそむ我が道ならず、アガミくよ、アガミ見侍らざ
そのをといひ、心にわたり、常の事なれど、

よふとあつたがゆるあり、アガミぬ道のうらやまし
くたばえは、アガミあなたうらやまし、アガミなごのあらまご
りけん、アガミといひてあり、アガミ我が智をどういぞ、人に
争ふ、角あるもの、角を傾け、牙あるもの、牙
を嚙出いたるひあり、人どしどし、善にあらざ、
物と争はざる、アガミ残徳といひ、アガミ他にまきつること、此ある、
大なる失あり、アガミ志な、アガミたご、アガミ才藝のまご
れたる、アガミあつても、アガミ先祖のほまれ、アガミあつても、アガミ人にまされ、
と思へる人、アガミたごひ詞にいそ、アガミそのいそ、アガミねとる、アガミ内

和

心にそとばくのとのあり。つゝして是を忘るべし。を許も見え人あもいひけし滅ことばはひをる招く。たゞこの慢心あり。一道あも誠に長とぬる人は。まづうゝあきらかふそ此非をある故に。志常にみざぐしく終に物おほらることなり。」

酒のいしり色 徒然草

ト部兼好

世に心得ぬあそ此多きをなり。ともある毎あひまづ酒をすめテ志強ひのませざるを興動とさること。いこの

れる故とも心得び飲む人の顔。いとたぐとげえ眉をひそめ。人めをはりりて捨んとし。おげんとするをとらへて。引とめて。すゞろおのませつれば。う莊ほしき人も。忽に狂人とありてをさしうましく。息災ある人も。目の前に大事の病者となりて。前後もあそをたふれあひ祝チリふべき日あどい浅す。うりぬべし。明る日まで頭いしく。物くはせお酔ひゆ。生をへどくたるやうに。昨日の事。覺下之公ん。たほやけわ私く。此大事をお開き

てわづらひとある人をしりしめを見よと
ど慈悲もあく。禮儀にもそむけり。うく辛きめ
に阿ひたらん人。ねく口をしと思ふぞらん
必思フミシやひとの國ふくるあひあなりと。こ身てに
外あき人の傳へ聞きたらんは。ゆぎたれば之
ぬ。人れ上ま見する。たよ心う。思ひ入
今マデハりたるさあ。心ふくし。見一人も思ふ所
欽羨なく笑ひせ。詞わやく。鳥ほう。ゆ
紐ほく。脛高く。げて。用意なき。げ。き日來
下傾

の人とも覺之び。女額髪三人モをれらのよりき。やり。
おのゆのう。顔うちさげて。うち笑ひ。益も
羞明ても手にとりつき。よからぬ人。肴とりて。口
さ。あて。みづうらも喰ひたるさまあ。聲のか
ぎう。おのく。う。ひまひ。年老たる法師
召出され。黒くき。かき身をわぬ。ぎて。目
もあてら。ま。び。ま。た。を興。見人さ
うと。あるは又我が身。いみ。き
事。傍。い。い。ひ。ま。か。せ。あ。の。醉。な。き。下

ざまの人^罵はのりあひひさかひさく^合ひさきま^詩くた
そろー耻がま^罵しく心うき事のもありて^終休て
いゆ^人とさぬ物どもた^諾ーとりそ縁うり落ち馬く
るまよりわちてあやち^負ち^痴の物にものらぬ
きは^人大路をよろほひゆきてつひ^染ひち門の下
あど^際にむきそ得もい^跟ぬ事^{嘔吐}ども^等ちあら^年ー年
老い袈裟うけ^重ころ法師の小わら^跟その肩をた
さく^不きこ^通えぬ事どもいひつ^不よろめきたる^不
いと^可か^哀の^可い^哀か^哀る事を^可あ^哀ても此の世も後^可れ

世も益あるべきわさをばい^可ふ^可はせん^可此の世にそ
い^過あ^失ま^失ち^失ね^失は^失く^失財をう^過ー^失な^過ひ^失病をま^過う^失く^過
百薬の長とはい^過へ^過ど^過万の病ハ酒より^過こ^過そ^過た^過これ^過
憂をわ^過ま^過う^過とい^過へ^過ど^過あ^過ひ^過たる人ぞ^過牙^過ぎ^過あ^過ー^過う^過
さを^過も^過思^過ひ^過い^過ぞ^過泣^過く^過め^過る^過
略下

諫争

人を諫るごとと 十訓抄

不知作者

たる時三、強制をばいよくいくる。威ある火
に、すこガ水をうけんガクニテ。その益あるべし。然れば
機嫌をばうりて、和にいさむべし。君も一たろ
かたりとも、賢臣あひたすけなば、その國亂るべ
くび、親を一おごりとも、孝子つ一みて志
たごりとも、其家全あるべし。重き物あきとも、舟
ふのせられバ沈むざるべし。上下ははれ
ども、ほどくおつけて、たのめてん人の為は、ゆ
めくらしめとあく、腹くちきとろのあるま

ト下きなり、二かげ陰めていす。冥加を思ふべき故也。
微子陰が、紂の心のを陰まらざる事陰をありたごり。
偽陰をたをきて、奴つことあり。何曹が、晋の政のた
ごり奴を諫め、家にうへりて、後憂言
あける一ことらは、身の為を一まへつらくる
計あり。報國の臣ふあレざることをぞあられ
しむ。

後白河院法皇六波羅へ御幸の後平重
盛卿父清盛卿へ諫言 源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

重盛^院卿御^ヲたくりに参りて六波羅へ歸り父に向
ひてさても一院の御幸こそたそ覺ゆ事との
たまひけきを清盛のたほしめ仰^補る旨の
聊もあれはこそ平家追討といふことも漏れ聞ゆ
らめなきは御幸ありともうちとけらるべ
らひと憤らきこれ重盛の此事ゆめく色
も詞も出させ給ふべし保元平治より逆
臣を誅罰しと勲功は多し今に至るまで

三寶の佛法僧

君の御ため不忠を存せられは何によりてか
一門追討の御企あるべきかやりの事にこそ人
の心つきそまことなき事に悪しき事をも思
出ひ事に候へこの世にも叡慮に背き給ふべ
人の爲に恵を施さんとたねふしめさば神明三寶
の御加護あるべしされば御身のたそあるべ
くはほやりの者となとぞいとまきける
大様

勅書

名和長年に賜てせし御書

扶桑拾葉集

後醍醐天皇

漫々たる海上に、いづくともなく漂ひて、四日ばかりのすきぬ、二十七日の夕ぐさあやアツク杵築の浦にて西風はぐく吹て、いりあるべきふりと心ざらざせしうども、風にまうせしに、夜より海上もあつこのあて、明ぬきこぼりしこも見ゆるふ伯耆の湊につきぬ楫とりも、今はあつカのつきぬといふ

をとりくして大坂といふところへつきぬころ、荒磯より釣舟だまされあり、この所のぬモナモといふものも都にありなまは、ぐくあつにつけえ、こととふべきものもな供しともなる人一人二人、猶人もとめみせし出ぬ楫とりもみげうせぬれば、あやヤマシもき苦の下に、只獨らぐもれ居迷る心の中、いもんくさあ直衣し、あんど引つくりひて、今はうぎりと待居るに、舟のまとも一人一人來り荒々しコトもなき、いアツクのあオモレテるに、あ

一きよ忠顯を尋ねて御迎のよしを奏ひられ
一あんどいりくるごめいをぞいふべしんゆる中
々其時の心もことばも及ぶべきふあひ思ひ出
るたびごとよ其氣味なほむねふあり忠を致し
輩いづきも疎あるべきふはあねども指あがり
て待出さるる心地なんことふべき方ぞあり
つゝ

忘れぬやフスレジよるべもなみのあゝ磯舟を

御舟舟上山の上にとめい心波を

長年が忠功後代の人あもあせんためよあらし
おく也を急ぐの君あもことを見せたてまつら
いいのなるのあらん私の子孫までも此忠の朽ち
トとたのへバ正直を以て報國としてゆくを急
久しくつゝたてまつる

院宣御請文

文治五年四月廿一日院宣の御請文

東鑑

源頼朝卿

四月八日のみげうも同キ十九日のこまりと

まいけんつ御教書のうまり候ひぬ出雲目代政綱まさつたぶること

申上候ぬ拜見い仕のぞ何そり奏聞りん候て出雲目代政綱ごらん出雲目代政綱ことを

君に申あげ候てあぬまち候て出雲目代政綱ごらん人を出雲目代政綱

たへ候事出雲目代政綱候べきた出雲目代政綱ー出雲目代政綱とも出雲目代政綱か出雲目代政綱れ出雲目代政綱を出雲目代政綱う出雲目代政綱くに出雲目代政綱

を出雲目代政綱め出雲目代政綱候はん出雲目代政綱こと出雲目代政綱返出雲目代政綱々出雲目代政綱ふ出雲目代政綱び出雲目代政綱ん出雲目代政綱よ出雲目代政綱た出雲目代政綱れ出雲目代政綱ひ出雲目代政綱給出雲目代政綱候出雲目代政綱

候は出雲目代政綱ご出雲目代政綱らん出雲目代政綱も出雲目代政綱ふ出雲目代政綱び出雲目代政綱ん出雲目代政綱に出雲目代政綱見出雲目代政綱給出雲目代政綱候出雲目代政綱申出雲目代政綱こ出雲目代政綱る出雲目代政綱事出雲目代政綱あら出雲目代政綱

それ候ぬま出雲目代政綱ば出雲目代政綱そ出雲目代政綱ま出雲目代政綱て出雲目代政綱よろ出雲目代政綱づ出雲目代政綱い出雲目代政綱り出雲目代政綱候出雲目代政綱ぬ出雲目代政綱くに出雲目代政綱

を出雲目代政綱ば出雲目代政綱ま出雲目代政綱し出雲目代政綱の出雲目代政綱ご出雲目代政綱と出雲目代政綱く出雲目代政綱さ出雲目代政綱こ出雲目代政綱ー出雲目代政綱く出雲目代政綱ま出雲目代政綱さ出雲目代政綱つ出雲目代政綱を出雲目代政綱あ出雲目代政綱く出雲目代政綱ぬ出雲目代政綱

も出雲目代政綱く出雲目代政綱だ出雲目代政綱い出雲目代政綱を出雲目代政綱め出雲目代政綱ー出雲目代政綱つ出雲目代政綱ふ出雲目代政綱べ出雲目代政綱き出雲目代政綱よ出雲目代政綱ー出雲目代政綱の出雲目代政綱御出雲目代政綱定出雲目代政綱の出雲目代政綱候出雲目代政綱らん出雲目代政綱

と出雲目代政綱た出雲目代政綱り出雲目代政綱ひ出雲目代政綱給出雲目代政綱候出雲目代政綱の出雲目代政綱ら出雲目代政綱い出雲目代政綱ま出雲目代政綱ま出雲目代政綱に出雲目代政綱御出雲目代政綱大出雲目代政綱事出雲目代政綱を出雲目代政綱と出雲目代政綱げ出雲目代政綱ら出雲目代政綱ま出雲目代政綱

候出雲目代政綱て出雲目代政綱ご出雲目代政綱らん出雲目代政綱ま出雲目代政綱は出雲目代政綱め出雲目代政綱た出雲目代政綱る出雲目代政綱な出雲目代政綱れ出雲目代政綱よ出雲目代政綱候出雲目代政綱い出雲目代政綱ま出雲目代政綱は出雲目代政綱い出雲目代政綱の出雲目代政綱

で出雲目代政綱う出雲目代政綱ま出雲目代政綱ま出雲目代政綱を出雲目代政綱ば出雲目代政綱ら出雲目代政綱ま出雲目代政綱あ出雲目代政綱ら出雲目代政綱せ出雲目代政綱ぐ出雲目代政綱候出雲目代政綱を出雲目代政綱ん出雲目代政綱よ出雲目代政綱ま出雲目代政綱く出雲目代政綱た出雲目代政綱

ほ出雲目代政綱せ出雲目代政綱ふ出雲目代政綱く出雲目代政綱め出雲目代政綱ら出雲目代政綱ま出雲目代政綱候出雲目代政綱て出雲目代政綱お出雲目代政綱も出雲目代政綱ま出雲目代政綱ま出雲目代政綱と出雲目代政綱ご出雲目代政綱の出雲目代政綱候出雲目代政綱ま出雲目代政綱ま出雲目代政綱き出雲目代政綱ふ出雲目代政綱

て出雲目代政綱候出雲目代政綱た出雲目代政綱め出雲目代政綱の出雲目代政綱り出雲目代政綱下出雲目代政綱向出雲目代政綱つ出雲目代政綱の出雲目代政綱ら出雲目代政綱ま出雲目代政綱つ出雲目代政綱ら出雲目代政綱た出雲目代政綱る出雲目代政綱よ出雲目代政綱ー出雲目代政綱ら出雲目代政綱け出雲目代政綱

給出雲目代政綱候出雲目代政綱ひ出雲目代政綱ご出雲目代政綱ら出雲目代政綱の出雲目代政綱い出雲目代政綱き出雲目代政綱ど出雲目代政綱ぬ出雲目代政綱り出雲目代政綱ま出雲目代政綱ま出雲目代政綱候出雲目代政綱ぬ出雲目代政綱

をうらふ心あきやうふ候ねをまの候しうども
申上り候もなまのくまこねそれ候うやうみ申
あげさせ給て候君に申あげ候もたのき人を
もいりきまをわこくをうらみ候事の候は
いのみ候とも事をあまの事の候まき候へ
んの候も何事を申あぐべく候まこ心へ
候候をぬふ候志げく申上候ねをま憚ふ候へ

將軍家御教書

建保元年五月三日和田義盛鎌倉を亂

一軍時將軍家の御教書 東鑑

波多野朝定

きん^{近邊}のまのにこのよふをふてめ^具
ま^{近邊}き^毛なりわ^{和田}ごのさ^{左衛門義盛}あ^{土屋}も^{兵衛義清}んつ^君ち^射や^君のひ^射や^射う^射ま^射
よ^{横山}と^{右馬允時兼}山のま^{右馬允時兼}れ^{右馬允時兼}ども^{右馬允時兼}む^{右馬允時兼}ほ^{右馬允時兼}ん^{右馬允時兼}を^{右馬允時兼}た^{右馬允時兼}ら^{右馬允時兼}く^{右馬允時兼}ま^{右馬允時兼}み^{右馬允時兼}を^{右馬允時兼}
た^奉て^奉ま^奉る^奉と^奉い^奉ども^奉べ^奉ち^奉の^奉事^奉を^奉き^奉あ^奉り^奉か^奉
ま^奉の^奉ち^奉り^奉ぐ^奉ふ^奉あ^奉り^奉た^奉る^奉錢^奉い^奉そ^奉ぎ^奉ら^奉ち^奉と^奉り^奉て

「あゝいへー」

消息

新大納言成親、卿備前へ流さる給ふを

り小松内大臣殿より京より

源平盛衰記

内大臣より御文あり。大納言あしく披き見給へば、都近き山里に置き奉らんとシテさそぐこしらへ申しつゝ、死罪を宥め申ひだみあは勸其事ゆめく決シテのちふすどと入道堅くのこまへ

力及む世に在るこしかあくらほ之侍り。たゞ御命をのりハ申し請けぬ。いづくの浦にたもいと。御心安く思召をべしマさそも替り行くうき世のありさまよしく思ひつゞけて念佛申しテ永く悟を開あんと思召いへしコト憂き心つらきも夢の世の中ナリともかくアハあも心つらきコトよしなき妻子ふ心をとめて晴ぬ闇路にまよひ給ふを。我世ふあらんほとん人々の事をばコトくみ申ひべし育「なんど遊しそ旅の粧さそぐ

ひとり残り留り給ふらんと人知まぬなげき
たゞ思召しソラぐコラクダサエやせたまへ一人々島へ流され給ひて
後そのゆりの者をば尋求めて手足を損どて
責問ふべし縁あど聞え侍りしうば召使ひし者
ども遠く國々へおちうせしふる里に一人も
とまらざれば都あは草のゆりも枯ればて
立紛るべき方もなく何をきいとをしと問ふ人
もたし公達も召捕へらるべしなごま
こえしうた母御前弟我が身三人引具してが

すのある便につきて鞍馬の奥とよかの迷ひ入
り日數も見えぬ山里に住みも習まぬ柴のいほ
ふ忍び居て候ひし間あど朝夕の御事をのぞき
き給へしうちそふいとけあき身のゆるきを忍
いよよせんと隙あき御物思のつもりあや口テリ病とな
らせ給ひしうば弟と二人とくくいはり
慰め参らせしうどもがなをぐして空しく見か
し参らせぬ生きその別死にてのわらせせんう
たふらむべし二人歎き暮し泣き明し侍りし



そん
てん

どよふ。又弟も疱瘡ととのや申ハいさほりハをしと。
今年の五月に身ま死ぐり侍り。同ト道一みと歎き
しうども。ばオレツヨリのなき露の命といひなき。消えも
やらでつれ強あ面く今までハ。草のいほりに残り留り
て侍れハたうハき事ハも悲ハき事ハも。おぼハしめハし知
るべハし。拙ハき果報ハのほどハこそ。宿世の身のつとあ
はづハのしハく思ハひ侍レ。故母御前御いさほりの時。
我死ハなば。誰ハをハの便ハと憑ハみハたハしハまハいハべハき。奈
良の里ハふハなハばハといふ人おハしハまハいハ尋行ハきハとく

うち歎ハのばハさハりハとも憐ハみ給ハをんハむハらんハと仰
せハれハしハを承ハりハたハきハて。當時ハ奈良の姨御前
の御許小侍り。たろハそのハあるハべき事ハにハいハあハねハど
もハうハそハかハなるハ住居ハたハしハはハのりハたまハへハさハてもハ此
の三年までハいハつハよハ御心ハづハあハくハらハともハむハむハらハうハけ
たまハもらハざるハらんハ。母御前ハあハもハ弟ハあハもハ後ハれてハ憑
む方ハなハしハ。誰ハにハあハづハけハいハのハよハせハよハとハたハぶハしハめハん
あハのハとハくハしハ御上ハりハたまハへハ戀ハしハともハこハひハしハ。
いハのハしハもハめハのハしハとハせハの思ハなハきハ水ハぶハきハ。

にづくづく侍れば留め候ひぬ。あなこのこ
く」と裏がききは「のききあげく薄くみたきぐ
きよぞとくりける」

參河守範頼が筑紫より彼の國あての

ありさまを忘らするついでに乘馬望

のよをもいひわたせたる返事東鑑
文治

元年正月
六日の條

源 頼 朝 卿

十一月十四日の御文。正月六日に到來今日。是よ

り脚力を立んと候つる程ふ。此脚力到來仰遣
したる旨委しくうけたまはり候ひ畢ぬ。筑紫の
事などり從わざらん。どこそ思ふ事あて候へ。
物騒しくびしてよしく國に沙汰志給ふべし。
構へてく國の者共に。あくまきびしてねをそ座
し馬の事。まことよさるべき事にていひれど。
平家の常ふ傾城くのみふ事にてあまは。か
たのづの。道もて押取らるをなどあてん事ハ
聞く耳も見苦しき事あてあらんずれを遣さぬ

なり。又内藤六が周防のせいを以て志を妨げ候。以の外の事なり。當時ハ國の者の心を破らぬやうなる事こそ。吉事にてあらんぞれ。又八島に御座を大やけ。并ふ二位殿。女房とちなど。少もあやまりあ。さやある事なくて。迎へり申させ給ふべし。うくとたも披露せしむ。二位殿かどの大やけを具し参らせ。向さまにおてはる事もあらん。たほかこハ帝王の御事。今ふ始めぬ事あれども。木曾ハ山の宮。鳥羽の四宮を討ち

明雲僧正 圓覺法親王

参らせ。冥加つきせ。うせにき。平家まこと三條高倉宮を討ち参らせ。かやうよりせんとする事あり。さればよく。あそめて。敵をこえ。さびて。あぐり。沙汰せらるべきなり。内府ハ。きはめて。憶病にねをせる人なまじ。自害などハよめせらまじ。生どり。ふより。京へ具し。上る座。さそ。世の末あ。言ひ傳へて。あは。い。少。吉事なり。かへん。此大やけの御事。おほつ。た。事あり。あ。あ。事なきやう。よ。せ。給

ふべー。大勢どもあも。此由をよく仰含めらま
候ふべー。あな嗚呼恐のーこ」
さそ侍ども不構へてくこらあぐなびそあ
るまきよーよく仰らるべー構へてく筑紫の
者どもあも悪まれぬやうにあるまもせ給ふべ
ー。坂東の勢をばあつとて筑紫比者どもを
もて八島をばあつとて念なきやうにあつとらよ
さ候ふべー敵よりおくなりと人の申さ
んよ付て敵あなづらせ給ふことこもある

べうび構へてく敵をあらさぬ支度をくよく
くあつとめて事を切らせ給ふべーなほく返す
々大やけの御事。ことあきやうよさこせさせ給
ふべきなり二月十日のこらよい。一定舟をあ上さ
んびるあり佐々木三郎筑紫へいくだりさぐり
たらよよそくさ備前の兒島をあ責め落し
ーこらなり構へてくいのあら物騒ーくぞー
て閑ふ軍志あふべー侍どもの事是によりか
まふよりあどくさやきなどく人不見らり

とまれ給ふべからば又路々の間兵糧なくあり
たるなど京より方々に訴へ申せどもさほど
大勢の軍糧料より上らざりしべいのでこのは
さななく有べきと思ふなり坂東も其後別
事もなし少も騒ぎ事候へば委しく此雑色
に仰せ含め候ひぬ返々千葉介事の軍も高名
してけり大事にせしむ候ふべし

まじ

國の者などたのづから落ちまらうで來る事あり

ばりておとよといをくせさせ給ふべ
し豊後の舟だもあはばやばき事なり四國
をば舟少々あはば是よりせめよといふなり東
國の舟ハ二月十日のころよ國をこちて上をる
あり猶々筑紫の事よしくちてめて物騒か
らび事なきやうよせさせ候ふべし又侍共
のさやうよ心々ありあんあるをいぞぐ以外の
なり實ふ其條さぞありん又方々より已れ
が事をば訴へあひたすども人のとていん

全くよるべし。誠によくだるもふるまをれな
で。そそでよき事なり。又人いふべし。所詮なく
おもんどもぞ。以の外の事にてあるべき。又小山の
者ども。いづれも殊にいとを^愛し給ふべし。あなか
—こく—是よりゆきこる者へ。こまを思は。當
時所知所領をさぐり候ふとも。さやうの論をすべ
き様なり。件のさまとげ。おめさせ給ふべく候ふ。
當時ハ構へて。國の者をすの^誘—よき様よは
くらせ給へ。筑紫の者も。四國をばせめさせ給

ふべし。此使ハ。雜色宗光。定遠。信方。三人のつひな
り。信方定遠ハ。京にあるを下にあり。宗光ぞ。國よ
り上^りびる。委^しき事ハ。宗光のもちたる文に申^し
たるあり。よろづよしく計ひて。沙汰をべし。あ
—こく—

御かへし

源 範 頼

重ねて仰せし御下文一まい遣し候ふ。國の者共
み見せさせ給ふべし。わらばく法師の事。用させ

給ふ。唐うづび候ふ。あながとく。甲斐の殿原の
中に。いさ。殿かみ殿ことよ。いと。と。く。志申
させ給ふべし。この。と。太郎殿。二郎殿の兄。と。
おほ。一。候へども。平家。おつき。又。木曾。おつき。
心を。ふ。ぜん。おつ。ひ。く。人。候へば。所知。な
ど。奉。る。べき。よ。は。及。を。ぬ。人。候ふ。なり。た。と。二郎
殿。を。いと。を。く。く。是。を。を。ら。み。候ふ。べき。なり。

三位中將維盛卿八島より京ある若君

姫君より。源平盛衰記

旅の空。ふ。ら。き。事。も。や。と。留。め。お。き。た。り。か
ども。な。あ。く。心。苦。し。く。必。む。く。と。り。か。ら。み
に。相。見。ん。ご。る。な。り。か。ま。と。世。小。な。き。者。と。聞
た。り。給。も。ご。こ。し。を。か。ら。み。お。御。覽。せ。よ。と。お。き
給。ひ。た。れ。ども。是。が。最。後。の。筆。の。を。き。み。と。も。い。ま
ら。思。召。ひ。べ。き。只。い。つ。の。な。き。人。と。聞。な。さ。ん。ず。ら
ん。と。う。ね。て。わ。ほ。も。ぞ。悲。し。き。

若君姫君の御返事 平家物語

た。と。ぬ。今。ま。で。の。迎。へ。さ。せ。候。を。ぬ。ぞ。餘。に。御。こ。ひ

しう思參らせて候ふ^{ヨリテ}とく迎へさせ給へ。と同
ト言葉^{コト}ぞうききたる。

維盛卿の息六代六波羅の囚をれ處よ

り母御前の許へ 源平盛衰記

心苦しく思給ふぞ。たゞ今まで何事も侍らば。
いつのたれも戀しくこそ思ひ奉れ。中も
も夜叉御前の御跡慕ひ忘れ難くこそ侍れ。

六條攝政殿の北政所より内大臣宗盛

公の御許小八島へ 平家物語

六條攝政殿云
云ハ盛衰記
にヨリテ
けリ平家物
語ニ或ル女
房ト云フ

九郎ハ^{義經}ととき男なれば。いのある大風大波を
も嫌ひ候もて寄せ候ふらんとおぼえ候ふ。相構
へて。御勢ども散らさせ給て。よく用心せと
せ給へ。

左少辨俊基朝臣の鎌倉小拘をきたる

が許に京ある北の方より 太平記

俊基朝臣涙をお拭ひふみを見給へ。消ゆる
露の身のおきどころなきふつけても。いなる暮
あななき世の別と承り候もんぞらんと心を

となく涙のほど御わしはかりもなほ浅く推量や
なんど詞小餘りて思の色ふのく黒くすぐるま
でかかれとり

元弘三年鎌倉攻の時新田義貞朝臣の
北の方より御伯父安東左衛門入道聖

秀の許へ太平記

安東涙を押へて惘然とる處ふ新田殿の北の臺の
御使とて薄様よりきたる文を捧げたり何事ぞ
とて披見れば鎌倉のありさま今はさそとこそホロミ

承り候へいふも一々此方へ御出候へ此程の式
をば身にかへとも申宥むべく候ふなとさま
ぐよかきとり是を見て安東大に色を損ド
て申一けるは梅檀の林小入る者ハ染めざるふ
衣自香一と以へり武士の女房とる者は健けな
げある心を一持てこそ其家をもつぎ子孫の名
をも顯下ものな略

和文讀本卷四 大尾

版權免許 明治十五年十一月十三日
出版 同年十二月

編輯出版者

埼玉縣士族

稻垣千穎

東京下谷區仲徒町三丁目廿番地

發兌人 東京

普及

同町四十六番地

奎文堂

日本橋區吳服町六番地



註歷代古文鈔 左傳之部四冊 定價壹圓貳拾錢
一地理撮要問答 全一冊 定價四拾錢

奎文堂藏版書目 明治十七年四月

井々竹添先生著 一棧雲峽兩日記 定價壹圓貳拾錢 全三冊	井々竹添先生手錄 同貳圓四拾五錢 全七冊	井々竹添先生手抄 同壹圓貳拾錢 全四冊	一元遺山詩選 同三拾五錢 全一冊	清合肥李鴻章原本 日本竹添先生閱 林正弘氏核定增補 一李氏歷代地理沿革圖 同七拾五錢 全一冊	竹添先生序 一如蘭帖(清朝人真蹟) 同七拾五錢 全一冊	井々竹添先生選輯 一參清大家詩選 一冊定價拾五錢宛 五冊已刻 全拾冊	岡松先生閱 一宋名家題跋 同三拾錢 全三冊	岡松先生著 一初學文範 同七拾五錢 全三冊	岡松先生著 一作文こころへ 同七錢 全一冊	高木怡莊氏編 一萬國地志要畧 同壹圓七拾錢 全五冊	右同氏譯述 一平幾可明辨 同四拾八錢 全二冊	水野氏著 一女子手紙之文 同拾貳錢五厘 全一冊	岡松先生著 一西客問答 同八錢 全一冊	岡松先生校 一獸醫全書 同六圓洋綴 全二冊	內務省編 一地方要覽 同壹圓七拾錢 全一冊	農務局御藏版 一紅茶製法纂要 同四拾八錢 全二冊	同 一和文讀本 同八拾錢 全四冊	稻垣千穎氏編 一朱子脩身問答 同貳拾錢 全一冊	松木氏編 一小學證券文例 同貳拾五錢 全一冊	津田氏編 一小事經濟教授本 同拾八錢 全一冊	小田氏編 一小學教授法 同三拾錢 全一冊	須田氏編 一和久氏著 同拾八錢 全一冊
--------------------------------------	----------------------------	---------------------------	------------------------	---------------------------------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	------------------------------------	---------------------------------	----------------------------------	------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-----------------------------------	---------------------------	----------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	------------------------------

右同氏述	一珠算教授本	同 五拾錢	全二冊
上野繼光氏編	一幾何精要	同 壹圓五拾錢	全七冊
水上珍亮氏編	一日本閨媛吟藻	同 貳拾錢	全一冊
岡松先生校定	一地理撮要	同 三拾錢	全二冊
同	一字引	同 貳拾錢	全一冊
一地理撮要萬國之部	同	同 拾五錢	全一冊
岡松先生閱 村上氏標註	同	同 拾錢	全一冊
一標純正蒙求校本	同	同 四拾錢	全三冊
岡三橋先生書	一蘭亭記 楷行草	一帖定價拾八錢宛	各二帖
竹山高田氏書	一五體千字文	同 三拾七錢	全一冊
桂州伊藤氏書	一雅俗文章	同 三拾五錢	全一冊
上羽勝衛著	一書牘便覽	同 貳拾五錢	全二冊
佐瀨得所先生書	同	同	同
一袖珍正字玉編	同	同 七拾五錢	全一冊
一畫引新撰會玉篇	同	同 三拾錢	全一冊

木下犀潭著門人竹添光鴻輯	一韓村遺稿	同 七拾五錢	全二冊
美國謝衛樓口述 清國趙如光筆記 日本岡千仞訓點	一訂萬國通鑑	同 貳圓五拾錢	全六冊
安積良齋先生纂輯	一魏叔子文鈔	同 六拾錢	全三冊
一岳忠武王集	同	同 拾七錢	全一冊
鐵槍齋青山先生著	一讀史雜詠	同 三拾五錢	全二冊
賴山陽先生選	一李忠定公奏議選	同 貳拾貳錢	全一冊
遊藏主人纂輯 一噓道人譯解	一譯解笑林廣記	同 三拾錢	全二冊
一高橋謙三郎編纂	一中唐十家絕句	同 三拾錢	全二冊
一小學	一生徒作文自在	同 四拾錢	全一冊
村山自強評選	一古文文章評解	每卷同拾五錢 每月出版	已刻三冊
森田真編	一蠶家創業要覽	同 三拾錢	全一冊
高木怡莊手解	一平幾何明辨解說	同 貳拾四錢	全一冊
清吳其濬原撰 日本小野職慈重修	一清吳其濬原撰 日本小野職慈重修	同	全四拾八冊

